

もし、一日前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

『いち にち まえ一日前プロジェクト』エピソード集

平成25年3月

目次

I . 一日前プロジェクトの概要	1
II . 平成 24 年度実施要領	2
III . 一日前プロジェクトのエピソードについて	3
平成 24 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧	5
編集後記	121
物語を集める	122
一日前プロジェクト みんなでやってみよう!	123

I. 一日前プロジェクトの概要

■「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただき、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

■「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「災害被害を軽減する国民運動」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心を呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

Ⅱ. 平成 24 年度実施要領

	対象災害	ヒアリング地区		ヒアリング対象	ヒアリング実施時期
1	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	岩手県	宮古市	鉄道事業者、 行政職員、 消防団員	2012 年 9 月
2		宮城県	気仙沼市	行政職員、 会社経営者、 団体職員	2012 年 9 月
3		福島県	新地町	住民	2012 年 9 月
4		千葉県	浦安市	住民 行政職員	2012 年 8 月 2012 年 9 月
5	館林市の竜巻 (平成 21 年 7 月)	群馬県	館林市	住民、行政職員	2012 年 10 月
6	三条市の豪雨 (平成 16・23 年 7 月)	新潟県	三条市	住民、行政職員	2012 年 10 月
7	長岡市の大雪 (平成 22 年度冬期)	新潟県	長岡市	住民、団体職員	2012 年 10 月

Ⅲ. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
1	地震・津波	列車に緊急停止指示 ～鉄道電話は津波で切れたが「あの場所なら大丈夫」～	東北	企業・職場	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	9
2		ワンセグや災害優先携帯もバッテリーが命				10
3		運転指令は「避難するので連絡絶つ」 ～まず 15 人の乗客の行き先を聞く～				11
4		突っ込んだ質問への受け答えで乗客との信頼形成 ～車内は電気も暖房も自販機もトイレまで～				12
5		あればよかった、列車にラジオ ～苦しかった情報途絶～				13
6		線路歩く被災者見て、「動かせるところから動かそう」と決意				14
7		宮古駅に止めた列車が災害対策本部 ～ライフライン完備で避難所より快適～				15
8		復旧列車にこどもが手を振る ～乗客と「ありがとう」の言葉かわす～				16
9		「4階に上がって」、「ダメだ、6階に上がろう」 ～市民や議員らと庁舎で悔しい夜過ごす～				17
10		決められた手順の F A X きっかけに、 避難所名簿や仮設希望も早期に把握				18
11		1 台の消防無線、庁舎の情報孤立防ぐ				19
12		「記録を残すしかない」とカメラ持ちだし、がれきの市内に ～撮っておけばよかったふだんの光景～				20
13		発電機つないで避難所向け情報作る ～毎回初めからの記者説明に徒労感～				21
14		計画上、何でもかんでも「生活課」 ～ほしかった「生活支援室」の支援室～				22
15		市庁舎と離れた自衛隊拠点で調整 ～決定権ないのに「決めるしかない」～				23
16		広域合併先の事務所で被災、食料配りで 3 週間 ～職場では 1 週間「行方不明」扱いに～		24		
17		山の農家がすぐ炊き出し ～おにぎり受け取り海側の避難所へ～		25		
18		真っ暗な中で拠点の庁舎に明かり ～フル活動でも燃料は 1 週間分確保～		26		
19		「怒られてもいい」と割り切って誘導 ～「田老(たろう)の人はグリーンピアに」と避難所集約～		27		
20		「並んでください」とマスコミ対応一元化 ～物資への質問には足りていますと回答～		28		
21		搜索の自衛隊に「まず道路から行方不明者を」と地図 ～がれきの上に消防団立ち国道示す～		29		
22		揺れた瞬間、「津波は 30 分後」と推測 ～役場に戻って 10 分で津波～		30		
23		深夜未明に何度も会議 ～明け方からの対応、スムーズに～		31		
24		地震直後は救助活動 ～その後は「記憶が夜に飛ぶ」～		32		
25		命がけの水門閉鎖 ～避難しながら女性も助ける～		33		
26		工事用看板で急造担架 ～救助を続けながら本部を探す～		34		
27		とにかく明かりがほしかった ～団員で持っていたのは 5 人だけ		35		
28		消えない山火事、消防団の出動続く		36		
29		津波かぶった愛車から貴重なガソリン抜き取り		37		
30		消防団、はんでんの重みでみんな集まる ～「助かった」の声に救われる～		38		

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ	
31	地震・津波	「団仲間に示しつかない」と率先避難を家族に指示	東北	地域・ご近所	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	39	
32		活動時間は 15 分 ～消防団員も自身の安全の確保を～				40	
33		水門閉鎖の訓練、実態に合わず ～丁寧すぎた確認動作～				41	
34		盛岡や宮古でも感じた温度差 ～飲み屋の津波の話も人ごとで腹立つ～				42	
35		「また、お菓子が作れる」と気づき、冷静さ取り戻す ～不安は「団や住民のため」と棚上げ～				43	
36		消防分団長でなければ、戻りたかった自宅 ～妻娘失い、行動の記憶ない～				44	
37		異動5か月で震災対応「求められた自分の判断」				45	
38		青果市場の跡地を支援物資置場に ～秋田県から毎日おにぎりの差し入れ3か月間～				46	
39		避難所食料の買ひだしは名刺で支払い				47	
40		徹底すべきだった防災訓練				48	
41		電源トラブル 万全だった津波シミュレーション生かせず				行政	49
42		乾パン5個の食事 ～いつ届くかわからなかった追加支援～				企業・職場	50
43		支援のヨーグルト腐らせる ～大変だった物資の配布～					51
44		「寒いのにどうして中に入れてくれない」 ～クレームに耐え館内の安全確認～					52
45		プールの水をバケツでトイレに ～実は使えた受水槽～		53			
46		職員の安否確認に1週間 ～作っておくべきだった連絡網～		54			
47		ペットボトルで即席湯たんぼ ～中学生がお年寄りに配る～		地域・ご近所			55
48		漁業を支える造船業 ～団結して復興を目指す～		企業・職場			56
49		避難に車を使うなの意味 渋滞で実感					57
50		2週間後に社員集合 ～まずがれき撤去から事業の再建へ～					58
51		従業員は解雇せず ～あきらめないで会社再開～					59
52		海沿いの高い建物に避難 ～冷静な判断で命助かる～		家庭			60
53		事前に見ていた津波のビデオ ～でも人ごとで自覚なし～		企業・職場			61
54		自治会役員として避難誘導 ～もう少し呼びかけたかった高台避難～		地域・ご近所			62
55		屋根に避難し九死に一生 甘かった想定		家庭			63
56		カツオの時期に再開するぞ！ 無我夢中の3か月		企業・職場		64	
57		予想もしなかった巨大な津波 ～毎日見ている看板で命助かる～		家庭		65	
58		津波を見に行き、帰らぬ人に				66	

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ	
59	地震・津波	震災以来、避難用リュックに下着常備	東北	家庭	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	67	
60		たまたま身につけていた運転免許証が意外なほど役に立った				68	
61		流された整理だんすからへそくりが出てきた！				69	
62		仮設住宅でも「禁酒」ルール化 ～アルコール中毒・トラブル未然に防止～		地域・ご近所		70	
63		女性パワーで活気ある避難生活				71	
64		意外なほどももの言う避難所の「肩書き」				72	
65		お財布、保険証、おくすり手帳 ～いつものバッグが身の助けに～		家庭		73	
66		忘れちゃいけない！ 離れた家族に無事の連絡				74	
67		窓に耳を押し当てて聞いた防災無線 ～御近所のお役に立ちたいと情報求める～				75	
68		言えなかった「お風呂をどうぞ」の一言		地域・ご近所		76	
69		災害ボランティアセンター立ち上げは経験者に任せて正解！				77	
70		お見送りは「行ってらっしゃい また来てね」				78	
71		手厚い支援に感謝し自立を目指す		地域・ご近所		79	
72		96 歳女性を救出するも、おむつを忘れて一苦勞				80	
73		旅館での避難者名簿が家族の再会に一役				81	
74		被災者も支援者も温泉でホッと一息				82	
75		自家用車内の避難者を数え忘れ、みそ汁が不足し大騒ぎ！				83	
76		被災者ながら必死に炊き出し ～事前の訓練役に立つ～				84	
77		トイレ掃除はこまめに。きれいな方が汚されない				85	
78		大きな手提げ袋が避難所生活で大活躍				86	
79		たくさん届いた支援物資 ～てこずった市民への配布～				行政	87
80		ツイッターのフォロワーは 600 人から 12,000 人へ					88
81		市内の新聞社と連携して震災翌日に「号外」を発行		89			
82		自治会への情報伝達 ～説明会で自助・共助の機運が生まれる～		90			
83		被災者だけど弱音を吐けず		91			
84		指揮官いなくとも気心知れた者同士で難局に立ち向かう		92			
85		日ごろの交流活動を生かして全戸の安否確認		93			
86		トイレの囲いは透けないシートで		地域・ご近所			94
87	消臭の決め手はベットのトイレマット	95					
88	住民総出で汚物処理 ～高校生や大学生のボランティアで大助かり～	96					

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
89	突風	間近に迫る竜巻、冷静な判断でやりすごす	関東	家庭	平成 21 年 館林市の竜巻 (平成 21 年 7 月)	97
90		10メートルの差で明暗を分ける				98
91		すぐに立ち上げた緊急対策室、素早い災害対応につながる		行政		99
92		急な気温の変化は何かが起こる前の予兆と心にとどめる		家庭		100
93		14時過ぎに竜巻発生、朝の4時までマスコミ対応		行政		101
94	風水害	住民みんなが顔見知り スムーズにいった避難行動	中部	行政	三条市の豪雨 (平成 16・23 年 7 月)	102
95		黒板に書いた自分の行き先 ～居場所の把握が安心につながる～				103
96		老人会を立ち上げ、訓練重ねた成果を実感		地域・ご近所		104
97		災い転じて福となす ～困ったときの助け合いがきずなをつくる～		家庭		105
98		「また来るぞ！」水害体験教訓に万全の準備		地域・ご近所		106
99		つい頑張りすぎてしまう復旧作業 ～何より大事な自分の健康管理～		家庭		107
100		愛するまちに住み続ける ～新しい家は高く、地盤のよい場所を選ぶ～		家庭		108
101		雪害		「大地震+大雪」からも復活！雪国の力強さ ～築 100 年の家で万全の備え～		中部
102	朝昼夕の除雪は冬の日課		地域・ご近所	110		
103	雪室の野菜でおいしい食事 ～日常生活がそのまま大雪対策～		家庭	111		
104	豪雪を味方に！			112		
105	雪国の知恵に感心			113		
106	災害ボラセンは 1 日にしてならず			114		
107	雪害ボランティア安全管理 3 つのポイント			115		
108	「からぶりもよし」先手先手で豪雪に備える		地域・ご近所	116		
109	雪害ボラセンから 震災ボランティアバックアップセンター (VBC) へ			117		
110	助け合いの文化は集落の誇り ～雪下ろしに駆けつける「遊雪隊 (ゆうせつたい)」～			118		
111	雪害は皆で知恵を絞って乗り越える			119		
112	災害が広げる新たな交流 ～雪かき道場で地域活性化～			120		

平成24年度
「一日前プロジェクト」
エピソード集

宮古市 50代 男性 鉄道会社職員



（列車に緊急停止指示
鉄道電話は津波で切れたが「あの場所なら大丈夫」）

地震が起きた時に、私は宮古駅に隣接している三陸鉄道の本社にいました。緊急地震速報がばーっと一斉に鳴り「あれ？また3日前にあったようなでっかいのが来るのかな」と身構えていたら、ものすごい地震が来て、ずーっと揺れがとにかくおさまらない。おさまってきたかなと思うと、また揺れてくるような感じで。かなり強い揺れが、もう5分以上続いたので、もう、あ、これは津波が来るなど、その時点で頭にありました。

沿線の2か所に地震計があって、基準を超える揺れがあれば、とにかく列車を止め、施設関係者が線路を点検した上でないと動かすなということになっています。南リアス線の方は、大船渡の指令センターと連絡が取れ、列車が長いトンネル内に入って止まっていることが分かりました。その場所は標高も高く、トンネルならまず中が崩れることはないので「とにかく動かすな」と指示しました。

北リアス線でも、列車がいる場所は分かっていたので、久慈の指令センターが津波で避難指示が出ていなくなる時も、「とにかく列車はそのまま停めておいて、とにかく後で救助に行かせる」ということにしました。

津波が来るまでは、何とか連絡がとれたんです。津波が来た後、ケーブルとか回線も切れたんで、鉄道電話も当然使えなくなりましたが、「あの場所だったら大丈夫だ」というのがありました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 50 代 男性 鉄道会社職員



ワンセグや災害優先携帯もバッテリーが命

かなり強い揺れが5分以上続いたので、これは津波だなというのは頭にありました。宮古市にある三陸鉄道の本社2階から、まちの様子を見てみると、何か水がこっちへ来ているなど。水がどーっと来るなら、すぐに津波だとわかったんですが、少しずつ水が上がってくる感じで、揺れで水道管でも壊れたかなと最初は思いました。そのうちに、ごみがぶかぶか浮かんで来るし、最後には車が来たんで、津波だと。想定ではここまで来ないはずだったのですが、まちの方からは、みんな走って逃げてくるので、うちも危ないからと、立体交差の道路の上に避難しました。

停電していたので、取り出してきたラジオを抱えて持って行って聞いていると、どんどん被害が拡大している。社員が持っていたワンセグでテレビを受信できたので見ていると、海岸沿いはとんでもないことになっているというのが、少しずつわかってきました。

津波が収まってどんどん引いていったので、夕方こっちへ戻ってきました。でも、ここは、停電でテレビが全くだめだったんで、東京の人より状況がわからなかったかもしれないですね。携帯電話のワンセグを使うと、バッテリーの消耗が早いで、切れたらどこで充電するんだってことで、ワンセグも頻繁に使いたくなかったのです。

その中で、地震1年前、新社長の方針で、災害時優先携帯電話を幹部社員らに持たせていたので、地震直後の連絡には大いに役立ちました。でも、通信アンテナのバッテリーがなくなったためか、2、3日で通じなくなり、県の振興局にある衛星携帯を順番待ちして使わせてもらいました。大規模災害時は、バッテリーが命であると思い知らされました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 鉄道会社職員



運転指令は「避難するので連絡絶つ」
 まず15人の乗客の行き先を聞く

三陸鉄道の北リアス線の山中で、運転中に地震に遭いました。無線にノイズ混じりで「止まれ」という声が聞こえたので、地震じゃないかとは思いました。ただ、落石や倒木、揺れも感じていなかったので、低速で小さいトンネルや橋梁のところを避け、「もうちょっと前に出そう、もうちょっと前に」と、安全なところを見つけて止めました。止まる寸前、立ち木が1メートルぐらいの幅で揺れているのが見えて、大きな地震なのかなと感じました。

停車後、いつもの臨時停車と同じように、15人のお客さんの行き先を確認し、無線で連絡を入れました。止めてから20分以上たって、久慈にある運行部からの無線で「こちらは津波が来るので避難する。この先連絡が取れないかもしれない」と判断を任されました。

私の得た情報は「大きな地震で何分か後に3メートルの津波」ということ。まず、お客さんにその情報を伝え、「この場所は30から40メートルは確実にあるので安全です。すみませんが、これから先、私の指示に従っていただきます」と、若干強目の口調で話して、無理矢理、納得していただきました。

高校生はワンセグを見て「仙台でマグニチュード7、いや震度7だ」と半信半疑でしたが、それでも明るく振る舞うのを見て、自分も冷静でいられたのです。

その時点では、5つ先の島越駅が津波に流されていたとは知りませんでした。ただ、日々の乗務で付近の道路も知っていたし、保線係として歩いた経験や土地勘もありましたので、お客さんに「ここは安全だから、ここで待ちましょう」と言えたのです。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 鉄道会社職員



突っ込んだ質問への受け答えで乗客との信頼形成 （車内は電気も暖房も自販機もトイレまで）

三陸鉄道の北リアス線で列車運転中に地震に遭って臨時停車をした後、乗客の皆さんに2時間から3時間は待ちましようとお話をしました。今までの津波の警報で、警報が注意報とか解除になる可能性も残っているのかなと思ったので。

皆さん、静かで、運転台に座ってる時間が長かったのですが、その間に、鉄道ファンのマニアの方が「地震のときはどういうマニュアルがあるんですか」とか、「ここの地形はどのようなですか」とか、いろんなことを聞かれ、全部きちんと答えて、安心して信じていただけたと思います。

列車を停止して3時間がたち、外も暗くなってきたので、年配の方が「どうするのだ」と言ってこられたのですが、その鉄道ファンの方が間に入って「運転士さんが待つとおっしゃっているので、待ちましよう」と言ってくれました。

外の状況はまったく分からなかったですし、足が悪い年配の女性もいらっしやったので、列車にいるほうが安全なんじゃないかと、安全第一に考えて中にいました。ディーゼルカーですし、燃料満タンで出てましたので、暖をとれますしトイレもついてる。自動販売機にお茶とかジュースがありましたんで、お客さんにははっきりは言わなかったんですけど、朝、明るくなってから動いてもいいんじゃないかなと考えていました。

でも、19時を過ぎ、救助に来た消防の方たちのライトが見えたときはホッとしました。社員が線路を点検し、畑の平らな場所まで列車を動かして脚立をかけてお客様に降りていただき、迎えに来た車に移ってもらいました。

最後に、社員から聞いた被害情報をお伝えし、「この先は気をつけていらっしやってください」と言うと、皆さんほっとしたような顔をされていました。鉄道ファンの方は列車に残る私に「列車監視御苦労さんです」とお茶を渡してくれました。

いつでも、様々なお客様を大切に乘せてきたからこそ、こうした想定外の状況でも、ふだんと変わらずに信頼し合えたのかもしれませんが。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 鉄道会社職員



あればよかった、列車にラジオ （苦しかった情報途絶）

三陸鉄道の北リアス線で列車を停車させてから私が出た情報は、久慈で大きな地震があったこと、停電になっていること、何分か後に3メートルの津波が来るという、その3点以外は何の情報もありませんでした。

その後、救助に来た消防団の方や社員から、ようやく新しい情報を聞いたのです。そうしたら、「8メートルとか、10メートルの津波が来たようで、すごい被害が出ている」そのように言われました。

地震から5時間後、お客さまの救助を完了し、車両を最寄りの駅まで動かすことになったら困るなど、一旦残ることにして、3時間ほど列車に待機しました。朝4時半くらいに起きて始発からの仕事で、すごく体がだるくて疲れているのですが、睡魔が来ないんです。8メートルとか、10メートルの津波が来たという情報のみで、津波はまるっきり見ることがなかったので、何があったんだ、どうしたんだって、頭の中で整理がつかない感じでした。自分が通ってきた線路や、その先の線路がどうなっているのかと。そこでちょっとだけ、恐怖みたいなのがありましたね。当然、家の方も心配になりました。

お客様に情報を何も出せなかったことも苦しくて、「やっぱりラジオでもあれば」と思い、早々にラジオを買って持ち歩き、2台目は手回し充電式にしました。会社でもラジオの導入を決めましたが、列車にも発信機能がある災害時優先携帯電話や衛星携帯電話を備え付けられればと思います。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 50代 男性 鉄道会社職員



線路歩く被災者見て、 「動かせるところから動かそう」と決意

被害状況をまず確認する必要があるということ、また、復旧工事をどうするかということもあったので、3月11日に協力会社へすぐ連絡をして、こちらから連絡したら、被害状況の確認にすぐ出られるようにしてもらいたいと、かなり早めに手を打ちました。

東日本大震災発生から2日後、ようやく津波警報が解除になったんで、じゃあすぐに線路の調査に出ようということになり、手分けして状況を見に行きました。被害状況は、南北で大きく差があり、南リアス線は壊滅的で当分、動かせないだろうと思いました。

北リアス線は、山の中の久慈と陸中野田（りくちゅうのだ）の間は被害が軽微で、流失した碎石を補充すれば復旧できそうでした。津波をかぶった田老（たろう）の駅も、構内のがれきを片付ければ、駅自体は使えそうでした。しかし、島越（しまのこし）駅付近は全く何も残っていませんでした。駅舎も陸橋もなく、がれきだけが散乱していました。

田老（たろう）と宮古の間はがれきで道路が使えず、皆、荷物を持って、ぞろぞろと線路を歩いている状況でした。駅前の家々も流され、土手の上の駅舎だけが残った田老（たろう）駅。その土手の斜面に、黄色と黒の化繊のトラロープが掛けられ、数日後にはハシゴになっていました。線路の上には伝言板が。それは、線路を人が行き来しているあかしです。

「動かせるところからでも、列車を走らせないと」と決意し、順番を決めて、被害が軽微だった久慈と陸中野田（りくちゅうのだ）の間を3月16日に、3月20日には宮古から田老（たろう）を動かしました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 50代 男性 鉄道会社職員



宮古駅に止めた列車が災害対策本部 （ライフライン完備で避難所より快適）

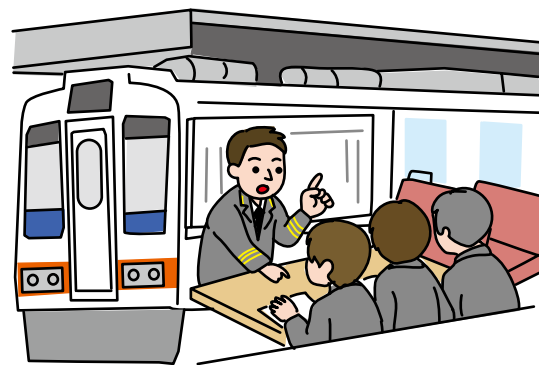
津波で宮古市にある本社の1階が冠水し、業務に必要な電気も電話も止まり、暖房も使えませんでした。津波が引いて、さあどうしようかというときに、ちょうどホームに午後3時発の列車が出発しないで1両いたのに気付いたんです。ディーゼルなんで、エンジンをかければ電気がつくし、暖房がかかるんで、あっちのほうがいいからあっちで、ということで、列車内に災害対策本部を作りました。

ホワイトボードのでっかいのと、1冊のノートを持って行って、それで状況を随時、運行部とも1時間置きくらいに連絡をとりながらやっていましたね。何があったか全部、ノートに記録していました。

まず状況把握しろということで指示を出したんですが、南リアス線は釜石や大船渡の被害を見て「もうこれはもう鉄道だめかも」という声が幹部からも出てしまうなど、かなり動揺があったので、本社から総務課長を送り込んで「まずとにかく少しでも動かすことから始めよう」と態勢立て直しを図りました。

社員は全員無事でしたが、家が完全に被災している者は帰らせて、内陸側で何ともない社員が中心になってとにかく早く動かすという方向でやりました。自宅待機でいいと指示した常務員も、遠くから自転車で通勤してきていました。

停電だった1週間近くは、列車の中の対策本部にずっといました。電気が通じた時点で、これで助かったっていう感じで本社に戻ったのですが、下手な避難所にいるよりはずっと快適でしたね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 鉄道会社職員



復旧列車にこどもが手を振る 乗客と「ありがとう」の言葉かわす

「明日、列車を動かす」

東日本大震災発生後、3月19日の会議で、宮古～田老（たろう）間の運転再開を伝えられました。20日の午前中に試運転を終え、12時に田老（たろう）駅から復旧列車が発車しました。

私は乗務員を指導するときのように、添乗する形で先頭車両に乗って、線路の状況などが安全かどうか、確認しながら乗っていました。被災後、住民の方が、線路を歩く姿を目にしていたので、住民の方が線路を歩かれていなければいいなという、そればかりでしたね。

結果、安全に運行できたのですが、周囲を確認していると、途中、遠くから列車を見ていたこどもが、大きく手を振ってくれたりもしました。

また、乗客の皆さまからは、ただただ、「ありがとう」という言葉をかけていただきました。大変な状況で助け合う中、染みついている言葉でしたので、私も「ありがとう」と返しました。3月中は無料で列車を運行していましたので、「乗ってくれてありがとう」という意味なのかなと、一瞬、自分の口から出た言葉を反すうしましたが、今、考えると、どこかで「お互いに頑張りましょうね」というような意味も含んでいたのかもしれないね。

地域のため、無料列車が運行した日のことを、私は忘れないでしょう。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 30代 男性 市役所職員



「4階に上がって、ダメだ、6階に上がろう」
市民や議員らと庁舎で悔しい夜過ごす

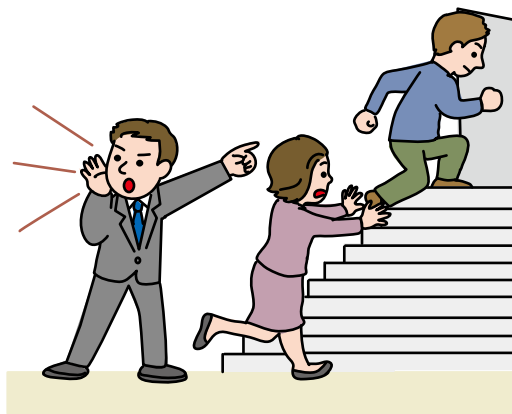
3月11日は、教科書会社から「田老の防潮堤の写真が欲しい」と言われていたので、防潮堤の上で写真を撮って、お昼ぐらいに市役所に戻ってきて、午後は庁内で事務をこなしていました。室内で事務をしていたところ、地震があったわけです。

当日は、議会の最終日で、これで終わりますという前に地震があって、揺れがおさまったぐらいのタイミングで閉会になりました。

最初は、防潮堤を越えて津波が来ると思わなかったんです。でも、川の底が見えた時点で、大きなのが来るんだろうなと。どんどんどんどん、水かさが増して行って、防潮堤を津波が越えたときには、私たちはもう市役所から出られない。

2階、3階にいた職員らへ、「4階に避難を」、「上がってください」って呼びかけ、「4階もだめだから、5階、6階に上がりましょう」って言って、市役所に来ていた住民の方も全員、避難させていました。

電気がすぐとまってパソコンも使えない、情報も入ってこないということで。その日は、市民から職員まで、狭い部屋にみんなで、ぎっぎついでいました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



決められた手順のFAXきっかけに、 避難所名簿や仮設希望も早期に把握

翌3月12日から水が引けてきたので、市では全職員で建物の被害状況、あわせて、人的被害状況を調べはじめました。調査をしていると、避難所がここここにあるよとか、情報が入ってきましたね。教えてもらった情報を市役所に帰ってから、ホワイトボードに書き出していくと、ここに300人いるとか、500人いるというのがわかってきて、本部会議で対応を話し合いました。

避難所を回る際に、自宅が全壊しているかなどから仮設住宅への入居希望も聞きながら、パソコンに打ち込み、名簿を作成していきました。その日の午後5時の段階では、56か所の避難所に8,468人の避難者数があることを把握し、14日には指定避難所以外の学校や公民館なども含め85か所の避難所の名簿を、プリントアウトして張り出しました。

仮設住宅も大体3000戸くらい必要になるんじゃないかということで、14日には仮設住宅で必要となる布団、鍋やお皿など、生活用品について、災害協定を締結しているホームセンターに、FAXで調達を依頼していました。

高齢者や病気がある方については、廃止にしようとしていた雇用促進住宅に3月中に入居してもらったうえで、仮設住宅は小・中学生の学区にも配慮して地域コミュニティを維持したまま一括で入居できるようにし、5月から入居を開始し、8月に終了することができました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



1台の消防無線、 庁舎の情報孤立防ぐ

地震直後、市役所から離れたところにある消防署から、消防職員が消防無線を持って情報収集に来ました。東日本大震災が発生した当日の情報は、この無線が頼りでした。市庁舎は津波で孤立して、停電していて、ほかの通信手段はすべて途絶していましたから。

消防署は被災していなかったので、翌 12 日に県から送信された防災 F A X も、その翌日の 13 日になってその情報を入手することができました。

内容は、あらかじめ震災前に決めてあった段取りや手順を示す書類で、訓練の時にも見たことのあるものでした。

最初の防災 F A X は、12 日朝に送られていたのですが、遺体搜索の遺体の取り扱い方が書かれていました。次が仮設住宅について、県の防災計画に決められている間取りとか、材料とかの F A X が届いたんです。田老支所にはちゃんと届いていたのですが、市役所は翌日に、消防から聞いて分かりました。孤立していても、持ってきてもらった消防無線で、情報を仕入れることができたんです。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 30代 男性 市役所職員



「記録を残すしかない」とカメラ持ちだし、がれきの市
内に撮っておけばよかったふだんの光景

ふだんは広報の仕事で外出が多いのですが、あの日は市庁舎の4階にいました。津波の情報が出ると、記録のためにカメラを持って海岸や海辺の高台に行ったりしていたのですが、あの日は地震の揺れが長くて大きかったので、庁舎4階のベランダに出て、カメラを手に河口を見ていると、津波が川に上がってきました。

津波が堤防を越えて来る瞬間、必死にシャッターを切り続けていたら、津波は市庁舎の1階を壊して町の方にへと流れ込んできました。さすがに「まずいな、建物が壊れるんじゃないかな」と思って、一瞬、家族のことを考えました。

でも下を見ると、1階の部分は壊れていましたが、何とか大丈夫そうだったので、今、自分にできることは「記録しかない」と思って、また気を取り直して、暗くなるまでその場所で写真を撮り続けました。

翌日、明るくなってから、また記録の写真を撮り始めました。町の人たちが、対岸から自転車や徒歩で橋を渡って、津波で泥だらけになったところに下りてくるのが見えました。

3日目になって、公用車も流されて身動きが取れないので、徒歩で行ける範囲でカメラを持って記録に留めようと同僚と2人で歩き回りました。まだこの日の昼過ぎまで津波注意報が解除されておらず、頻繁にサイレンが鳴って、高台に逃げながらまた降りては撮って。思うようにはかどりませんでした。

課長からは、なかなか戻ってこないのが非常に心配され、戻ってから怒られました。ただ、課長も広報担当の経験があった方なので、「出るなどとは言わない。気をつけて、出る」と言ってくれました。数日はそのまま、がれきの市内を記録し続けました。

撮影しながら浮かんできたのは、「何もない時の街並みを撮っておけばよかった」という虚（むな）しさでした。



写真提供 岩手県宮古市

インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



発電機つないで避難所向け情報作る
（毎回初めからの記者説明に徒労感）

避難所にいる方々への情報提供をどうしようかという話になり、停電しパソコンも使えない状況でしたが、発電機を使ってパソコン2台とプリンターを1台動かしてもらいました。2日目の夕方から被害や避難状況、電力の復旧状況、あそこの道は通れないといった被災状況、あの病院が診療をはじめましたとか、各関係機関から来る情報をまとめて、1日1, 2回、避難所向けに情報提供用の資料を作りました。

マスコミさんの数も増えてきて、避難所向けと同じ資料を渡していましたが、広報担当からすると定期的な記者会見で対応というのが一番いいのですが、最初のうちは定期的な会見はなかったのです。電話は、幸いというか、つながっていなかったのですが、記者さんたちが全国だけでなく海外からも来て、正直、コミュニケーションや文化の違いもあり、非常に苦劳しました。

記者さんたちは、同じ会社の方々がいろいろな編成で入れかわり立ちかわり来て、引き継ぎも全くなされていないので、また初めから説明になる。最初にちょっと見てきていただければ、まだ助かるんですが、地理的な感覚もない。ほんとに一から説明ということを、毎日繰り返してやっている、何日か経つと、マスコミさんへの対応がまずくなってくるんですよ。そうじゃだめなんだと、思っているんですが、正直なところそうなるんです。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 30代 男性 市役所職員



計画上、何でもかんでも「生活課」 「ほしかった」「生活支援室」の支援室

震災前の地域防災計画見直しの際、市民生活部にはものすごい業務量があったので、有事の際にはとても対応できないと返事をしていました。

地域防災計画の想定をはるかに超えた震災が起こり、いざ危機管理課に「何をすればいいですか」と言ったら、地域防災計画どおりに動けという指示でした。市民生活部は、避難所の担当もあり、食料の手配に始まり、次々と業務が増え、身動きがまったくとれませんでした。また、全国からの支援物資をどこに保管しようかということになり、翌日には体育館にシートを引きに行きました。翌々日には毛布等物資が届きました。通信機器が使用できない状況で、6万食の食料がヘリコプターで届くという情報が実際はがせネタだったり、様々な情報が錯綜してすごい状態でした。

4月以降も、避難所の統廃合や片付けに追われました。さらに、義援金の支払事務が生活課の担当になり、阪神大震災の際に作られた被災者支援システムが届いたのですが、改修に時間がかかることが分かり、最初の支払いから3回目まではシステムを使用せず支払いを行いました。応援職員の方もいらっしゃいましたが、最初は1日交代だったので交代すればまた一から説明が必要で、時間がない中かなりの労力が必要でした。ほんとに震災からずっと寝ないで動いていた状態だったので辛かったです。

6月には、生活課の中に被災者支援室ができました。支援体制への不満や仮設住宅でのめごとなど重い内容の対応も多く、精神的にも辛い状態が続きました。私は「この支援室に、支援がほしい」と、心から願っていました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



市庁舎と離れた自衛隊拠点で調整
 決定権ないのに「決めるしかない」

市役所が被災していたので、応援の自衛隊が消防署を本部だと思ったのか、そこに拠点を置いていたので、私が市の災害対策本部との連絡・調整を担当させられることになりました。

市役所では、朝8時ごろからと、夕方の16時頃から本部会議をしているので、自衛隊はその後、宮古消防署に戻って、22時、23時まで会議をやるんです。そうすると、自衛隊の会議で決まったことを「これをどうしましょう」と私に聞かれるのです。市役所側の部長や課長級的意思決定者がいないため、判断されないまま自衛隊は動けないという状態が何日か続きました。

部長の携帯に電話して「こうやっていいですか」とか聞いたりしましたが、時間がないこともある。「家が道路に流れてきているんですけども、ここを壊さないと次に行けないので、壊していいですか」と聞かれ、いいとも言えず、悪いとも言えない。でも、「その先に人がいます」と言われれば、じゃあ壊してくださいと言うしかない。「じゃあ、お名前をお願いします」、「〇〇課の××です」、「では、〇〇課の××さんの指示ですね」と自衛隊に言われるわけです。

決定権がないのに「決めるしかない」状況で、いや、これはまずいよな、首になるかもと何回も思いました。

自衛隊さんは組織なので、「とりあえずお願いします」では動けなくて、こっちが明確に決めなきゃならない。最初、市役所では炊き出しの関係とか、あまりお願いしなかったんです。2日間かけて、ここに何食で何日にとか、きっちりすり合わせし、いざ決まれば、すごい早さでしたね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 60代 男性 市役所職員



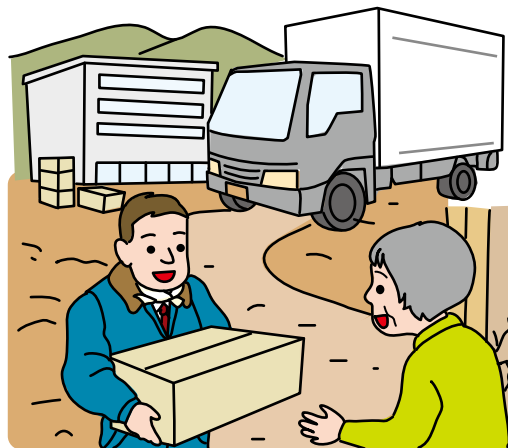
広域合併先の事務所で被災、食料配りで3週間
 職場では1週間「行方不明」扱いに

私は、日ごろの勤務地ではない山間部にある川井（かわい）総合庁舎で被災しました。3月末に退職でしたので、その日の夕方から送別会が予定されていました。職場の仲間は、私が移動している最中に津波に遭ったのではないかと、随分心配したそうです。そんなこととは知らない私は、同じく山間部にある新里（にいさと）地区へ車で様子を見に行きました。しかし、海沿いの田老（たろう）地区とは全く連絡が取れず「全滅したのでは」と最悪の事態が頭をよぎりました。でも、山間部は無事なようだ判断し、食料の確保と配布にあたろうと、夜のうちに水道事務所に移動し、仮眠を取りました。

翌日は朝5時から食料の配布に出かけました。道路が寸断され、どこに配ったらいいいのか戸惑う職員も大勢いました。こんなときに幹線道路が不通でも裏道を知っていると役立つものです。ルートを教えて、炊き出しのおにぎりや、水、ジュースなどを配ってもらいました。

結局、それから3日ほど水道事務所でダンボールを敷いて寝泊まりし、食料配りをしました。着替えなどもなく、寒いので川井地区の職員にジャンパーを借りました。それでも首回りから冷えるので、翌日からはネクタイを締め、更にも上からタオルを巻いて働きました。

しかし1週間後にやっと市庁舎に戻ってみると、何と職場の黒板では「行方不明」扱いに。そのくらい、当時は連絡がうまく取れていなかったのです。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 30代 男性 市役所職員



山の農家がすぐ炊き出し おにぎり受け取り海側の避難所へ

私は、田老地区の総合庁舎にいたのですが、津波はやばいと思って山に走って逃げました。津波が落ち着いてきて、庁舎に戻ってからは、避難している人たちの対応をしていました。

夜になって食料がないということになって、3人1組になってしょいかごを持って、山のほうの地区の人たちに食料を分けてくれないかということをお願いをしました。

また、川井（かわい）地区や新里（にいさと）地区では、こういう状況だと大変だということで、婦人会などでおにぎりをつくって用意してくれました。集会所のガス調理器具を使って、お米を炊いて、塩おにぎりをにぎってもらって、それを私たち職員が3人1組で海側の避難所に配ってまわるということ、朝3回、昼3回、夜3回という形で、3日間やりました。

地域防災計画では、日赤奉仕団で炊き出しをすることになっていて、釜もガスも旧地区ごとに持っていたのですが、合併後に市役所に集めて点検、整理して、元に戻そうと言っていた矢先に、被災して流されてしまいました。

でも、農家には、米が最低3年分あることを知っていましたので、寄せ集めれば何とかなる、と思っていました。避難者の数を把握すれば、後は何とかなると思い、避難していると思われる場所に職員を派遣して人数を把握していきました。明日、何時までにいくつ欲しいと伝えれば、後は作ってくれる。後は誰が運ぶかで、夜通し運んだりもしたところもありましたね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 30代 男性 市役所職員



真っ暗な中で拠点の庁舎に明かり
フル活動でも燃料は1週間分確保

田老地区は全体が被災して、道路はがれきで埋まって全くない状態で事務所だけポツンとあるような状況でした。ただ、総合庁舎は自家発電機があったので、まち全体が真っ暗な中、そこだけ明かりがついているような感じでした。田老の自家発電は、非常用ではなく、日中の100%を補える電力を作れます。発電機の燃料タンクの容量がだいたい1週間分くらいで、1週間ほっといてもいいというくらいの燃料がタンクにありました。

被災したガソリンスタンドも、実は無傷というか何ともない。上はがれきで一杯になっているかもしれませんが、地下はなんともないので、地下からどんどん汲み上げました。ガソリンスタンドの人と協力関係を結んで、みんなで燃料を汲み上げて、避難所に何種類も燃料を運んだりしていましたので、実は燃料に困っていませんでしたね。

避難者の名簿は、当日夜にはできあがって、大きいプリンターで印刷して、避難所に貼り出しました。その避難所にいる人は、明日から動き始めるからということで、誰がどこに移動するのか、書きとれるように、メモできるように紙を置いておくようなことをしていました。それで人の動きを把握していましたね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



「怒られてもいい」と割り切って誘導
 の人はグリーンピアに」と避難所集約
 〽 〽 田老（たろう）

3月11日、田老地区の市街地から離れた高台の公共リゾート施設「グリーンピア三陸みやこ」に避難してきた人たちが入ったのは、ホテルの中の廊下とかでした。

避難所として指定していたのは、「グリーンピア三陸みやこ」にある体育館で、ホテル中ではなかったのですが、当日は、非常に寒くて体育館ではだめだった。ホテル中では、お風呂もやっていたし、そっちじゃないとだめだった。

計画上では体育館でした。震災の起きる前は、避難所経費の問題で冒険できませんでしたが、実際にはいけるかなと思っていた。本物が来たら、そんなこと言てられないと。

実際には、グリーンピアで仕切っていたのは、私のかつての上司が退職後に働いていた。避難してきた人がホテルの中に入っても、避難場所は体育館の中ですよという人もいなかったということです。

田老地区では、避難所が10か所ほどできていましたが、想定外で環境が良くないところもいつまでもそのままにして置けませんし、学校もできるだけ早めに再開しないといけない。ですので、1か月でみんなが住めるグリーンピア1か所に避難所をまとめ、ほかの避難所を閉鎖しようということになりました。

それで「怒られるのが当たり前だから、怒られましょう」と割り切って、「避難所を移動してもらいます」という説明を被災後1週間で話しました。避難所を移動する日の2週間前に怒られておいたので、2週間後には自分たちで荷造りをするという状況にもっていかれました。早めに話しておけば、だんだんその気になっていく、ということですね。予定通り、3月31日には避難所を一か所にまとめることができました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



「並んでください」とマスコミ対応一元化 物資への質問には足りていませんと回答」

私は震災当時は農業課だったのですが、合併前の田老町の防災担当から6年ぐらい危機管理にいたので、震災の時には田老地区での活動、マスコミ対応から、引き受けてやっていました。田老地区の総合庁舎には、地域振興課とか農業課とか林業課とか色々な課があったのですが、津波の瞬間にいた職員は、組織横断的に、誰誰さんは何をと、職務を割り当てて、課とか関係なく分担して動いてもらいました。

田老地区でのマスコミ対応も、色々な人たちへ取材・質問がいくだろうけど、職員は誰も答えないでくださいと言いました。答えるのは1人だけにしぼりましょう。誰も答えなくて、みんな私のところに紹介していいから私の名前言ってくださいとお願いしました。特に「物資は何が必要か」という質問には答えないでください、という話をしていました。

たくさん集まるマスコミには、「順番に並んでください」と言って、私が何か対応している時には待ってもらいました。次々とマスコミの質問をこなしていき、「何が足りていませんか」という質問には足りていますと回答しています。

自衛隊とか県と物資の調整では、何をいくつ、何日までに欲しいとか、これは一週間経ったら必要ないとか、結構細かく書いて渡していました。それで調達できないものは、直接、ボランティアとかに相談したりして、やりくりしていました。

被災した地区と、被災していない地区との気持ちのあつれきがあるわけです。直接は被災していないけど、道路が通れなくてライフラインも途絶えている中で食料も調達できない、家が無事だから避難所にも行かない地区がある。ボランティアが色々な支援に入ってきたときに、避難所には自衛隊が炊き出しもやっている
ので、地域の会長さんとかキーマンになる人を紹介して、「この地区に行ってこの人に相談してください」と、ボランティアを差し向けるようなこともやっていましたね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



搜索の自衛隊に「まず道路から行方不明者を」と地図
 がれきの上に消防団立ち国道示す

国道の上の流されてきた家屋を早く撤去しないと道路が通れないので、道路啓開（けいかい）が、まず必要でした。

地震翌日の12日の朝早く、田老地区にも自衛隊が来ました。最初に入ってきた自衛隊の部隊が受けている命令は、行方不明者の搜索です。続いて生活支援とか、炊き出しの方になってくるわけですが、不明者の搜索の指示を受けている自衛隊に道路啓開を頼んでも無理なんです。

なので、地図を広げて、国道の上を指示して「ここの搜索を優先してお願いします」という頼み方をして道路啓開をやりました。消防団員に、がれきの上に立ってもらって、ここが国道だということを示してもらいました。土地をわかっている人が、ここの下に国道があるんだということを教え、自衛隊がそこを優先して行方不明の搜索をしていくというやり方をしました。

住民の方には、避難所から何時に出て何時にもどるかといったこともメモしてもらい、携帯電話の番号も把握して、家屋の解体の了解や立ち会いとか、自衛隊に荷物を出して運んでもらうとかの連絡をとれるようにして、道路啓開を早めに終わらせることができました。

また、側溝の中のがれきも片づける必要がありましたが、「側溝の中にも遺体があるかもしれない」という見方で、自衛隊に協力してもらい、がれきを撤去することができました。

そんなこんなで、自衛隊の撤収は、1カ月後の4月11日。それまでに、遺体の搜索もローラー作戦で3回くらいやって、もう行方不明者もない、遺体もないでしょうという状態になっていました。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



揺れた瞬間、「津波は30分後」と推測

（役場に帰って10分で津波）

10年近く役所で防災の仕事をしていましたので、感覚的にどこからきた地震で、マグニチュードがどれくらい、これは津波警報が出そうとか、そういうのがわかるんです。

3月11日は、外にいて、緊急地震速報が鳴って揺れて、「あ、宮城県方向だな、この揺れは変だ」と思い、すぐに職場があった田老（たろう）地区の総合庁舎に引き返しました。

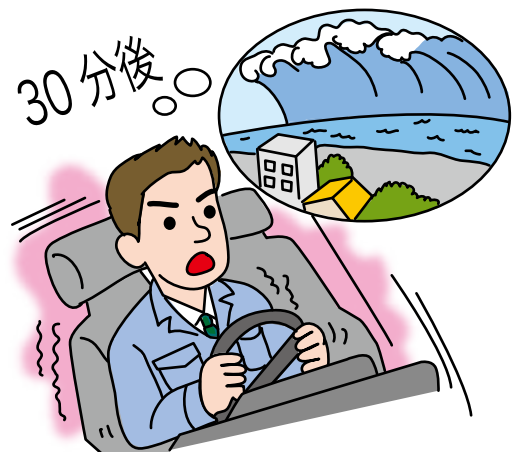
車線の真中をどっちにでも行けるような状態で走りながら、「100メートルくらい通り抜ければ、後は渋滞はない」ということも考えていました。その途中、家族が全員避難できたことと、職場の全員がどこにいるかをメールで把握していました。

揺れた瞬間から時計を見ていて「30分後に津波が来る」と予測したのですが、田老の総合庁舎に20分に戻って、その10分後に津波が来たのです。ぴったりでした。ただ、ラジオで言っていた宮城県方向からの津波ではなく、真正面から来た津波だと直感的に感じました。

で、たった5分間で終わったんです。

津波が鎮まった直後に周りの人に「防災無線聞こえたか」と聞きました。自分の耳に残っていなかったのです。後から映像を見たら、ちゃんと音が入っていましたから、鳴ったのは確かですが、私の記憶にない。周りの人たちもそうでした。目の前に津波が迫っていたんで、自分たちが集中していたのは津波のこと。周りの音は耳にはいらぬ状態になるということがわかりました。

津波が来る直前までは、いろんな情報を仕入れようとしていたので、周りのことも鮮明に覚えています。言葉も全部覚えています。でも、津波が着た瞬間からは、もう津波しか覚えていない。周りのことは分からないですね。人間て、そういうふうになるんですね。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 40代 男性 市役所職員



深夜未明に何度も会議

（明け方からの対応、スムーズに）

被災当日は、管理課にあった発電機を6階に急遽持っていきました。燃料だけが若干あって、大丈夫でしたが、情報が入ってこない。電話もつながらない。下には津波の水があって外に出られないし、虚しい時間というか悔しい時間を過ごし、夜になっても動けないで、多くの職員らはただただ6階とかに、みんなでいたんです。

そんな中で、1時間おきに災害対策本部で、部長を集めての話し合いを行っていました。当日は、議会の最終日だったので、幹部もみんな市庁舎にそろっていました。津波に襲われた後の午後4時に第1回の本部会議をしてから、午後11時までに9回。夜の12時に10回目、午前2時には11回目でした。そこで、「今日は終わりで、次の日、朝6時からやりましょう」となって、12日午前6時からが、12回目の会議でした。

情報が入らない中でも、1時間おきに、「今、何をしなければならないか」、「これはどうする」、「あれはどうする」とか言って、話がまとまっていったから結果的に次の日、みんなが動けたんだと思います。

夜のうちに、「被災していない川井地区と新里地区で、炊き出しのおにぎりを作って、パイパス沿いの水道事業所に持ってこい」とかの指示も出ていました。翌朝、水が引けてから、全館の職員が建物の被害状況とあわせて、人的被害状況を班に分かれて調べて、避難所がここここに500人いるとか300人いるというのが分かって、次々にホワイトボードに書いていけたのも、考える時間があつたからではないでしょうか。



インタビュー日：2012年9月10日

宮古市 50代 男性 消防団員



地震直後は救助活動

その後「記憶が夜に飛ぶ」

地震が発生したときは、田老（たろう）で仕事の保険のセールス契約を済ませた直後でした。たまたま、よりもよって消防署の田老分署にいて、雑談をしているところで地震が発生しました。自分の消防団の集合場所である屯所の近くにいたので、ほかの団員たちと水門を閉めに走りました。消防分団長がいなかったため、私は無線機を持って、ほかの団員が水門の閉鎖作業を終えるのを見ていました。

初めは防災無線から津波警報が鳴っていたのに、途中からサイレンも何も鳴らなくなった。手に持っていた消防の小型無線機で「午後3時20分に津波が来る」ということを聞いて、作業が終わって戻ってきた団員に、そのまま山の方へ逃げる指示をして、裏山まで避難させました。

それから10分するかしないかで、津波が来ました。湾の入り口に波の壁ができたときは、自分たちのいた山よりも高く感じたので、奥にあるお墓のところが高いので、周りの人たちに移動してもらいました。

それを確認してから、最初に避難していた場所に戻って、逃げ遅れていかだのように流れていく屋根に乗っている人を救助したり、「人の声がある」と言うので捜索のようなものはしましたが、危ないので団員たちをあまり屋根の上とかに載せないようにしていました。

記憶があるのは、そこらへんまで。そこからぼんと記憶が飛ぶんですよ、夜に。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



命がけの水門閉鎖

避難しながら女性も助ける

私は大工職人をしているので、仕事場がその日によって変わるのですが、たまたまそのときは田老に田老にいて地震に遭いました。携帯の緊急地震速報が来て、「これはまずい」と思ったら揺れて、仕事をやめて消防団の屯所へ駆けつけられたら、すでに1人来ていてポンプ車のエンジンをかけてた。すぐ2人で水門の閉鎖に向かいました。

交通量が多い水門は最後に締めることにして通過し、次の水門では外にいる水産加工場の人たちが車で逃げるので半分閉めていたので、その誘導をしてから閉めました。

今度は町のほうへ一回りしていると、避難先に向かう50人ほどの保育園児たちが見えたので、ポンプ車でほかの車を止めて園児を避難させました。

そのあと、水門へ戻って、そこにいた他の団員が別の方に回るので、私がその場に残っていました。そうしたら、大きな揺れで電柱が音をたてて倒れてきたので、やばいなと思って高い方に走って行って、振り向いたときには、津波は防波堤と同じぐらいの水位だったんです。消防署のタンク車が走って来たので、立ち止まって「(高い方の) こっちに走って来い」と合図をしたのですが伝わらなかった。

「だめだ」と思って、駆け足で上の方に避難しようとしている途中で、波に足を取られてしまいました。ようよう立ち上がって、高いところ上がったのですが、女性の声がしたので藪(やぶ)を下がって行って、泥にはまっていた女性ら3人を引き上げました。

それとき、火が見えていたので、その後は火事の対応に向かったのです。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



工事用看板で急造担架

救助を続けながら本部を探す

津波が収まった後、ポンプ車も流されてしまい、1人では救助活動も火災対応もできないので、まず本部に連絡しようと思いました。途中で、海を見に来た人や工事の人が避難している高台で人数を確認し、たまたまそこにいた同級生と一緒に山を越えたりして戻ってきました。津波の時には、消防団のポンプ車を避難させて本部を設置することになっている中学校の校庭に向かいましたが、そこには本部がありませんでした。

いったん、知り合いから懐中電灯を借りて総合庁舎に行って、避難している人たちのために持てるだけ毛布を持って中学校に戻りました。その後も、あめとか水とかを総合庁舎に取りに何往復かしたり、消火活動に当たっていた署長を案内したり。その日は、結局、寝たのか寝ないのか分からなかったです。

次の日は、朝から6人ぐらいで海の近くの方に救助活動に行き、前日に避難していた人を確認しながら、海岸近くの高台にある旧国民宿舎跡地へ行き、工事用の看板を外してロープで応急担架を作っておばあさんを下ろしたりしていました。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



とにかく明かりがほしかった
団員で持っていたのは5人だけ

盛岡から田老に戻ってきてから、普通に歩けば10分ぐらいで行ける場所まで、1時間以上はかかって団のみんなのところに向かいました。国道は通れないので、防潮堤の上を歩きました。上には防潮林の松や電柱、漁具があって、とても普通に歩ける状態じゃないので、はったり、越えたり。持っていたポケットライトが命綱でした。

明かりはとにかくほしかったですね。懐中電灯の不足はすごく感じました。夜の救助活動のときも、20数人いる団員のうち、明かりを持っていたのは5人程度ですから。

また、捜索が終わって午後7時から、報告と打ち合わせの会議のために総合庁舎に行くのですが、行き来は電気もない三陸鉄道のトンネルの中を1人で歩くことになる。あの寂しさといったらなかったですね。

ヘルメットに付けられるヘッドライトは良かった。両手の自由がきくから仕事するときは楽。懐中電灯はどうしても持って歩かなきゃならないから。他の人が、流された軽トラックからヘッドライトを見つけて使っていたのはうらやましかったですね。被災した家の中に、常備灯のような懐中電灯の明かりがついていたりしたのですが、さすがによそのうちを持ってくるのは悪いような気して、置いてきました。今にして思えば、持ってくれば良かったなと何回も思うんですが。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



消えない山火事、消防団の出動続く

宮古のほうにちょっと買い物があったので車で走ってたら、なんか揺れて「車がパンクしたかな」と思ったら、停まっても揺れている。あれっ、これ地震だ。とんでもねえ揺れだなと思って。そのときは通じる気がしてかけたら、携帯も全然通じない。すぐ引き返して、うちまで20分ぐらい。

太平洋というか、みんな真っ白になっていた。若い団員が来て、電話連絡がつかないから、田老の消防に行ってこいって言ったらすぐ戻ってきて、田老もそんな状態だと。暗くなってまだ余震もあるから、搜索は明日の早朝からすっぺということにしたんです。

道の駅に避難してきた人が、田老の町が火事だ、山から家から火事だと言われたので、連絡が取れない団員もいたのですが、「行くべ」って行ったら、山から家からも火事だ。

住民の人と、水利がどこだとかって、3人でどうにかこうにか次の朝まで消火活動をやったのかな。朝の4時半くらいだったかな。すっかり濡れたから寒くなって、「1回着がえしてくっぺ」って、着がえして、すぐまた、田老のほうにおりた。

火災は4カ所で起きてて、2カ所が津波による民家火災から延焼、もう1カ所は車が燃えながら山に漂着して火災が発生。翌日には沢のほう。暖をとるためのたき火の不始末なのかもしれないけど、そんなことは責められないです。

なんぼ消しても、行くとガスがシューって音をたてていて、「逃げろ、逃げろ」と、またぼーんと燃える。杉の枝が二重にも三重にも重なって、水かけても最初のころは消火できなかつたです。

風が吹くたびに火災出動があつて、最終的には、19日までかかりました。その間、搜索もしながらです。19日には、もう絶対にここから火を出すなよっていうんで、しつこいくらい水かけたのは覚えてます。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



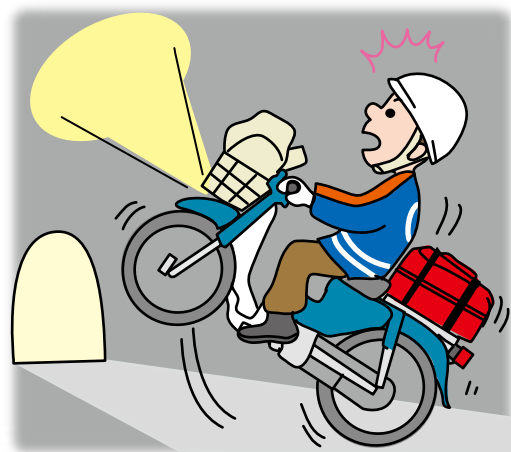
津波かぶった愛車から貴重なガソリン抜き取り

車が道路を通れるようになった後も、愛車は郵便局のATMの下敷きになったり、裏の車庫で水に浸かっていたのですが、自動車の整備工場の若い人に協力してもらって、安全な方法で自家用車からガソリンを抜き取りました。作業の際、使い古しのマスクがフィルター代わりとなりました。

もともとガソリンは揮発性が高いものですから、静電気でも引火しやすく、素人が扱うのは大変危険で、新車は、より抜き取りが難しくなっているそうです。

90ccのバイクを消防団の副団長が借りてきてくれたので、地震後初めて、家族に会いに行くことにしました。避難している家族が田老（たろう）に来てもらうために、こちらからガソリンを運んだんです。

前にも荷物を積んで運転していたのですが、後部座席に積んだ20リットルのガソリン携行缶が重くて、上り坂のトンネルの中でバランスを崩して前輪が持ち上がってしまったんです。最初、また、地震か何かが起きたのか、それともパンクしたのかなと思ったんですけども、ライトがトンネルの壁を照らしたので、自分がウィリーして壁にぶつかりそうになっていたことに初めて気がついたんです。それで、自分の体重を前にかけて、やっと落ちつけたのを覚えています。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



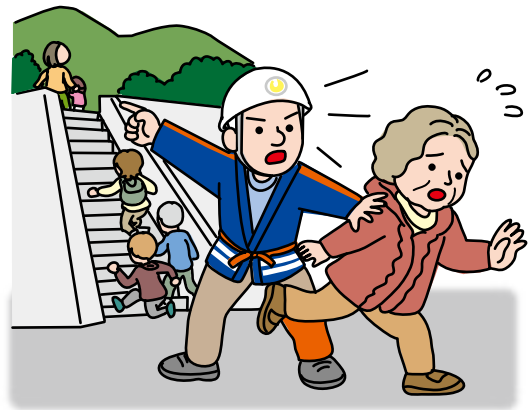
消防団、はんてんの重みでみんな集まる
 「助かった」の声に救われる

青年団はなくなる、婦人部はなくなる、漁協の青年部だって縮小してきて、地域の任意団体がだんだん少なくなる中で、消防団はまだ組織的に動けるので、その地域でのいろんな役割をみんな包括的に補うようになってきているんです。お祭りのために出なきゃなんないとか、本当にこれ消防と関係あるんだべかなというようなものまで駆り出されたりしている。仕事を休めば一銭も入ってこない人もいるんですが。

でも、消防団員という立場ではんてん着てる以上、責任を感じねばならない。特に責任者とかになると、より自由がきかない。自分から先に家族の安否を確認しに行くわけにいかない。このはんてんを着たら、多少の怖さとか言っちゃいけないと。みんなが逃げるのを見てから、最後に行くのが自分の役目だったと思ってたから、嫁さんには「父さんが（地震直後に地元）いたら死んでいますよ」と言われてる。隣の消防分団長の家族が亡くなっているのを知らないで、様子がおかしいのでどやしつけてしまったりもしたし。

大きな余震で津波が浸水する恐れがある地域に車を入れないように国道を閉鎖したら、消防団にはそんな権限はないので通せと言われた。でも、もうああいう光景は見たくないんで、通しませんって頑張ると、警察は消防団に任せるって、ちぐはぐなこともありました。火災が迫ってきて、夜、避難させるのはかえって危ないと、権限はないけど勝手に判断して、一軒ずつ回って避難を呼びかけたりもします。

救いは、住民の人たちに、「消防団のおかげで助かった」とか、「おかげさんだ」って言われること。だから、こうやって続けていれる部分もありますね。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



「団仲間に示しつかない」と率先避難を家族に指示

私の家族は、震災 2 日前の地震のときに避難しなかったのです。私はそれを聞いて、非常に怒りました。「何はさておき、逃げろ。消防団の仲間にも、住民にも示しがつかないじゃーないか」と。おかげで震災当日は、無事に逃げおおせて助かったのです。そのうえ、家族は周囲の人にも迅速な避難を促すこともできたそうです。

私が山火事の消火に行くとき、団員の中に家族が行方不明の人がいました。まず彼には、家族を探すように言いましたが、「家族がないのは心配だが、かといって 1 人でウロウロ探しても…」と躊躇（ちゅうちょ）している。これまでも、消防団員は個人的なことを後回しにしてしまいがちです。

こうした議論はいつも行われてきました。団内でも様々な意見があって、「家族の安否を確認してもらってから、団員の活動をしてもらうべき」、「身内の心配があると、団の活動も本気になれない」という声です。団員も人の子ですから、こうした指摘には一理あります。

ですから、だれもが少しでも身近な心配事をなくすようにするため、事前に家族と相談して「迅速な避難」を心がけるよう徹底しておくべきでしょう。これが、非常時であっても、判断力を鈍らせない唯一の方法ではないでしょうか。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



活動時間は15分

消防団員も自身の安全の確保を

震災前に見せてもらった津波のシミュレーションの映像で、津波が田老（たろう）の堤防を軽々と越え、家々が津波にのみ込まれいく。それが我が家だったので、かなりショックを受けました。訓練で、防潮堤にある高さ2メートルのゲートを閉めに行ったときも、まるで自分の勇気を試されているような感じで複雑な気持ちになりました。

消防団の使命に「住民の安全」と「避難誘導」が課せられていますが、自身や仲間の安全については「危険を感じたら逃げろ」としかなく、消防団としての活動内容は定まっていません。それで、安全に消防団が活動できるルールづくりを決めました。

三陸沖地震の津波は最短20分で来ると、専門家の先生からも聞いていたので、自分たちの避難時間の5分を考慮すると、地震の直後の15分が避難誘導にかけられる時間です。しかし、この地区には水門が3か所、陸閘（りくこう）が6か所あり、これを閉鎖しなければならない。こうしてできたのが作業時間の「15分ルール」だったのです。

そこで、消防団では住民に素早い避難してもらうよう地域に理解を求めました。もちろん、今回の震災でうちの分団からは犠牲者を1人も出さずに済みました。全国に、この15分ルールをほかの消防団に紹介できていたら、消防団員の犠牲者は、もっと少なくて済んだのではと。それが、残念でなりません。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



水門閉鎖の訓練、 実態に合わず 丁寧すぎた確認動作

消防団の訓練では、水門を閉鎖したら、そこで残って確認することになってました。津波注意報の時も、残って津波を確認するとか、そんな変なやり方があった。もともと、津波が来るのに、一番危ないところに残って、そこで眺めているというのはおかしいんです。閉めたら、さっと避難というか、逃げる。そういうのをちゃんと伝えておけば良かった。

そのころは全然思いつかなかったんだけど、「率先避難」というのはいい言葉。危険性を知る消防団が逃げてみせるというのが一番いいと思う。でも、震災前なら、それを言った時点で、先輩とかOBの人らに「何だおまえら、フヌケ」って、その一言で終わりだったね。

消防団のはんてんを着たら、多少の怖さは口に出せないし、はんてんを着て先に逃げるわけにもいかねえって。犠牲になっても当たり前みたいな存在。訓練で500メートルぐらい離れた水門を担当して閉めに行ったときに、それは勇気というより、あたかもその人の度量を試されているような気がした。そういう思いは、自分はもうさせたくない。そのことが、いかに危険だということを、今回は一番思いました。

震災前、津波が地震から20分で到達するというシミュレーション結果などを地元の人たちに説明したとき、水門閉鎖に15分活動したら消防団も逃げると言ったら、何人かのOBの人たちから、「消防団が先に逃げるとするのは考えられない、そういうのをおまえらに教えたことはない」と言われました。でも、その人たちは津波を経験したことがないので、いかに自分たちが危険なことをやっているかを認識していなかったのでしょう。

今だったら、「消防団が率先避難」と言っても、だれも怒りはしないとは思いますがね。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



盛岡や宮古でも感じた温度差 飲み屋の津波の話も人ごと風で腹立つ

地震から10日後、仕事で盛岡に行かなきゃならなかったのですが、やっぱりギャップがすごい。こっちでこういうことがあったのに、盛岡はもう普通の生活ですよ。何か、そのギャップで頭の中が、混乱するんです。夜の食事を仲間と居酒屋さんみたいなところで食べたりしたんですが、ほかのお客さんたちが津波の話をしているんです。けれども、もう人ごとの話なんで、聞いていると最後には腹立ってきましたね。こっちはめためたに何もなくなっているんだって。

宮古市内でも、駅を挟んで全然対照的で、市の中心部に行ったときも、ちょっとギャップを感じましたね。市内でも、早期復旧できる人たちは、全然ニュアンスが違いますっけね。

「いつまでも被災者って思わないほうがいい」って、被災者が言うんだったらわかるんですよ。でも、家が残っている人とか、被災していない人が、「おまえら、いつまでも被災者じゃねえんだから、人に頼るのはやめたほうがいい」って。言葉はもっと緩やかなんですが、それを聞いたとき、「おまえがそれ言うかよ」って思ったときがありましたね。

自分らも、いつまでも負け犬だったり、そんな気持ちは毛頭ないし、ましてや敗者、負けたという気持ちもないんだけど、ただ、ああいう言葉遣いは、よっぽど気つけなきゃいけないなと思いましたね。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 50代 男性 消防団員



「また、お菓子が作れる」と気づき、冷静さを取り戻す
 不安は「団や住民のため」と棚上げ」

地震から1か月は、ほとんどの消防団員に従事してもらったような感じでした。団体職員さんとかは招集がかかると仕事のほうが優先になりますが、活動から離れるのは最初はごく少数でした。最終的には、半数近くの人たちが仕事に戻り、そうすると残った団員でやらなきゃならなくなります。

消防団員も、皆さん家族を持っていますから、早く自立するために、仕事に復帰して仕事を優先してもらいたかった。2か月近くたつと、民宿が流されて仕事そのものを失った人も、仲間のガス水道屋さんで使ってもらうとかして、皆さん仕事そのものにはつけるようになりました。

私は、菓子店を経営していたのですが、家も店も工場も津波で流されました。5月中旬に仮設テントの商店街が建つことになって、宮古のほうで復旧している同業者が「自分たちがつくったお菓子をおまえのところで売っていいから」って応援してくれたんです。応援されいながら、「俺、いつ自分で本当にお菓子がつくれるようになるのかな」と思い始めたときに、すごい焦りはあったんだけど、だんだん冷静に考えるようになりました。

その前までは、分団員のためとか、住民のためとか、あとは何かに置きかえていたんですね、自分のことじゃなく。何かそれが足元をすくわれたような感じがあった。考えてみたら「復帰してねえのはおれだけだな」と。自分はいつから仕事が本当にできるようになるんだろうかと、不安に駆られながら、対応していかなきゃならない。

仕事の基盤になる道具を全部流された漁師の人たちが、漁業の道具そろえていかなきゃならないのと同じように、工場を建てたくても、工場を建てる場所が浸水域だからそこには建てられない。なので、土地を探すところから始めなきゃならない。そんな自分のことを考えるようになったのは、2か月過ぎてからでした。

1年後、消防分団長仲間から「人の車借りて仕事して、消防団やって、家を建てねばなんねえけど、金はねえし場所もはっきりしねえので、どうしたらいいか。あのとき（津波で）流れていたらよかった」という話を聞いて、ショックでした。その人も「黙って仕事をやっているときが一番気が安らぐ。何もしないでといると、逆に滅入ってしまう」と言って活動を続け、いまは落ち着いておられます。消防団員にとって、仕事は団活動のエネルギーでもあるんですね。



インタビュー日：2012年9月9日

宮古市 40代 男性 消防団員



消防分団長でなければ、戻りたかった自宅
 妻娘失い、行動の記憶ない

古い防波堤の近くにある工場で地震に遭いました。外に出てみると地面が波打っていたので、揺れが収まってからポンプ車に乗り、海に近い水門を閉めに行きました。その後、警報が出て、家業の石材工場近くの水門も閉めに行き、付近の人を小学校へと避難誘導しました。

津波の情報も入らず、状況がわからないまま、小学校近くの水門を2人の団員と閉めに行き……大きな津波が来たのは、その直後でした。1人は川を流されてきて助かりましたが、1人はそのまま行方不明となり、あとで見つかりました。

避難先の小学校では、児童の家族が車で迎えに来たとき、引き渡すかどうかでもめました。安全を考え、留まるように説得したのですが……。更に悲しいことは、おばあさんが自転車で迎えに来て一緒に帰った小学生が、津波の被害に遭ったこと。あとき、止めておけばよかったと、悔やまれてなりません。

私も、妻と娘を亡くしました。消防分団長という立場もあり、地震の後、自宅に戻れなかったのです。しかし、戻っていたら、自分も流されたかもしれません。今はまだ、妻子の最期の場所を見届けておきたい気持ちと、そこには足を踏み入れられないという複雑な気持ちでいっぱいです。そこに立てるまでには、まだ時間がかかるかも知れません。

私には、震災直後の記憶が全くありません。消防分団長として目の前のことは処理していましたが、頭の中は家族のことだけでいっぱいでした。



インタビュー日：2012年9月9日

気仙沼市 30代 男性 市役所職員



異動5か月で震災対応「求められた自分の判断」

議会の事務局で会議録をまとめているときに震災が起きました。ドドッとすごい揺れでした。急いで第二庁舎の広場に避難しました。市役所前の道路は、まるで川のようなようでした。

私の担当は、防災センターにかかってくる電話の対応です。2011年11月に危機管理課に異動してくる前は、議会事務局に所属していたので、それまでは防災に関しての知識・経験がありませんでした。

かかってくる電話は、初めは安否の確認、そのあとは、支援の要請、遺体の安置場所の問い合わせが続きました。気仙沼に大川という川があったので、被害が大きかった石巻市の大川小学校の問い合わせもいくつか受けました。それらをすべて自分の判断で処理していかなくてはなりません。とにかくひたすらメモをとりながら対応しました。関係機関とのやりとりの中では、専門用語が出てきて理解できずに戸惑うこともありました。

今回、改めてどんな立場であっても戸惑うことなく、対応できるように勉強しておかないといけないと痛感しました。それには、全職員が、全部署の基本的な役割・知識を理解して、適切な行動がとれるように、日ごろから意識することが大事だと思います。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 40代 男性 市役所職員



青果市場の跡地を支援物資置場に 秋田県から毎日おにぎりの差し入れ3か月間

職場の階段を下りたところで、今までに経験のない揺れを感じ、急いで屋上の駐車場に避難しました。ここは避難所にもなっていたので、その対応をしなくてはなりません。備蓄食は 14,000 食用意してありますが、これでは足りそうもありません。幸いにも秋田県庁が、14 日から毎日おにぎりを 3 か月間届けてくれました。

カツオ売上げトップという土地柄、水産庁や、高知県、宮崎県、三重県からの支援物資の援助もあり、青果市場の跡地を支援物資置場に設定して 1 か所に集約しました。佐川急便さん、クロネコヤマトさんからノウハウを教えていただき、自衛隊の協力を得て、各避難所に支援物資の宅配をしました。1 週間ぐらいして落ち着いてからは、県から地区ごとに契約して宅配業務を行うことになりました。日赤からは毛布が届きました。一関の体育館を毛布置場にお借りしましたが、何と毛布だけで、体育館がいっぱいになってしまいました。これは現在、備蓄物資として利用しています。

緊急時の防災協定がありましたので、近隣の県からの支援は一関を窓口にして対応しました。また、ふだんから近隣の県の担当者と連絡を取りあっていましたので、素早い行動をとっていただき感謝しています。



インタビュー日：2012 年 9 月 24 日

気仙沼市 50代 男性 市役所職員



避難所食料の買いだしは名刺で支払い

市役所の災害対策本部は食料確保を担当して、避難所の運営に重点を置きました。総務部の職員が食料担当となり、花巻市を中心に内陸へ買いだしに行きました。現金がないので市役所の名刺を提示しての買物でしたが、量販店、コンビニなど多くの協力を得ることができました。

震災3日目の14日にやっと衛星電話が使えるようになり、関係機関と情報をとりあえるようになりました。それまでは、2万人という想定もしていない数の避難民の対応策に、災害対策本部としてやるべき仕事、市としてやるべき仕事、マンパワーの比重のかけ方にも温度差がありました。あの状況では無理であったかもしれませんが、もう少しきちとした情報交換をしていればよかったと反省しています。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 50代 男性 市役所職員



徹底すべきだった防災訓練

今回の震災で助かった人も、亡くなった人も、危機意識が低かったとは到底思えません。中には、家族や近所の人を助けに行くために戻って、助からなかった人もいました。

津波のある地域には、“てんでんこ”という言葉があります。まずは、自分の命が大切です。てんでばらばらでもいいから、とにかく逃げようという教えです。これをもっと徹底しておけばよかったと思っています。

私は、市役所で防災担当を仰せつかってきました。実際、市の防災訓練は新人にしか行いませんでした。やはり職員全員の防災訓練を定期的に行うべきです。そして、防災担当が変わっても、永遠に訓練し続けることが大事です。

今年3月、全職員が担当して地域ごとにバラつきがないよう徹底して逃げる仕組みを作りました。もっと早くに作っておくべきでした。そしてこれは、市だけでなく県全体で取り組まないといけないと思います。「まさか、うちだけは…」という意識の落差を埋めて、「ここなら安全」というイメージをもってはいけません。今ならというより今だからこそ、最高の仕組みを作れると思います。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 50代 男性 市役所職員



電源トラブル 万全だった津波シミュレーション生かせず

私は市役所で防災担当をしています。

地震の当日は、気象庁の大津波警報の前に携帯メールで津波が来ることを確認しました。そこで、最初に「高台に逃げてください」、「大津波が来ます」という大津波警報を発信しました。更にこの地域では、警報だけではなく、サイレンも鳴らすことにしています。なぜなら、たとえ文言がはっきりと聞こえなくても、サイレンの音なら必ずやだれの耳にも聞こえるはずですから。

また、震災の直後はとにかく津波の情報がほしかったのですが、自家発電設備はあるのかかわらず、1階の電源盤が壊れてしまったので素人が修理しても使えそうにありません。携帯電話のワンセグも電源がなければ使い物にならず、結局何の情報も入ってきませんでした。

もし10分前に津波の情報が入っていたら、1年前のチリ地震と2日前の地震のデータを分析してどのくらいの津波が来るのかを想定できて、被害を少なくできたのではないかと、今でも悔やまれます。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 50代 男性 市民会館職員



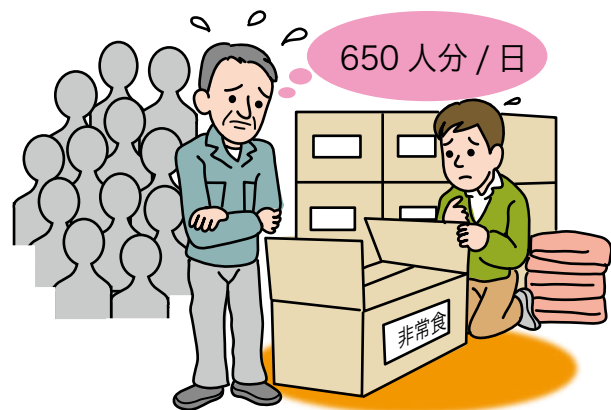
乾パン5個の食事

（いつ届くかわからなかった追加支援）

私は市民会館に勤務しているため、地震に遭った日は、市民会館で避難してくる方の誘導を行いました。避難してきた650人ぐらいの人を会議室、和室、玄関、廊下、楽屋に避難していただき、入りきれない人には玄関ホールに入ってもらいました。毛布の備蓄は20～30枚ぐらいしかありません。古新聞、ダンボールも用意しましたが全然足りません。

その日の食事は、1人、乾パン5個です。追加の食糧支援がいつ届くかわからない状態ですから、人数分用意できるものを慎重に配分するしかありません。缶詰の備蓄もありましたが、こちらは全量量が足りなかったので使用しませんでした。情報もない、物資もない、人だけでは多い中での決断でした。

2日目は、おにぎり半分に乾パン。不足分は栄養補助食品で補いました。夕方になり、やっと市役所から塩おにぎり500個が配達されました。17日ぐらいからパン会社が、毎日菓子パンを届けてくださりありがたかったです。



インタビュー日：2012年9月23日

気仙沼市 30代 男性 市民会館職員



支援のヨーグルト腐らせる 大変だった物資の配布

外勤中に東日本大震災に遭いました。揺れがすごく、立っていただけなかったので、近くにいた3人とスクラムを組んで耐えました。揺れが収まり市民会館に戻る途中、信号もつかなくなりました。市民会館には既に住民が殺到していました。

ここを避難所として開設した後に、物資の配布方法が大変な作業となりました。班分けをして、リーダーを手上げ方式で決めて、それぞれの班にリーダーから食事を配布してもらうことにしましたが、実際に組織化は難しかったです。

支援物資のヨーグルトが650人にいる避難民のところに100個しかなく、全員に配布することができないので、結局腐らせてしまうということも経験しました。2日後には、人数分の食料が届いたので助かりましたが、物資の配布は今後も大きな課題となりそうです。

「現状はどうなってるのか」、という問い合わせも多数ありましたが、こちらでも確認できずに対応ができませんでした。私自身も携帯が繋がらなかったのも、家族の安否さえ確認できませんでした。1週間後にやっと東京にいる兄弟と連絡が取れ、父が亡くなったことを知らされたのです。きっと無事に避難してくれているだろうと思っていたので、このときばかりはショックでした。通信手段が閉ざされ、家族安否ができなかったことは一生忘れられない事実です。



インタビュー日：2012年9月23日

気仙沼市 30代 女性 市民会館職員



寒いのにどうして中に入れてくれない
クレーンに耐え館内の安全確認

勤務先の市民会館でいつものように事務を行っていました。あの日は保育士の会議、高齢者の展示販売などのイベントが行われていて、200人ほどの人がホールにいました。また、その日は、海沿いの南町で200人ぐらいの集会とデモ行進が行われることになっていましたので、近くには数多くの警察官が見回りに出っていました。

地震直後のごった返す市民会館に、見回りの警察官の方々がいらして、避難誘導を手伝ってくれました。揺れが収まり事務所に戻り、避難所開設のため、非常時の毛布出しの準備をしました。防災無線は聞こえなかったので、ワンセグで状況確認をしました。

その後、市民会館入口付近では、地震直後から市民会館に集まり始めた避難者が「寒いのになぜ中に入れてくれない」「軒下でもいいから入れてくれ」と、ちょっとした騒動になりかけました。なぜ、市民会館に入れなかったかという、大ホールの石こうボードが少し落下していたので、まずは館内の安全確認を優先させたのです。

外はみぞれが舞い始めていました。お年寄りも子ども連れもいましたので、身の切られるような判断でした。しかし、すべての安全確認を済ませないと、二次災害を招きます。確認が終了した午後4時ぐらいに避難所として開放しました。



インタビュー日：2012年9月23日

気仙沼市 50代 男性 市民会館職員



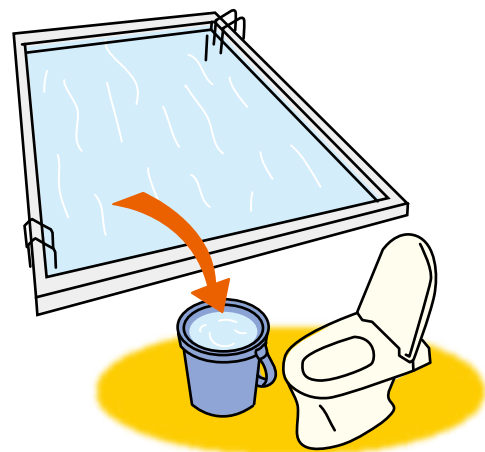
プールの水をバケツでトイレに 実は使えた受水槽

私は昭和 53 年の宮城県沖地震も経験していますが、今回の地震は今までに体験したことのない揺れと長さでビックリしましたし、とても怖かったです。

その日は、いくつかのイベントが行われていて、一つ大きなイベントが終わり、大勢の人がホールから出てくるところでした。すぐに外に避難するように指示しましたが、一部の方たちが、簡易テーブルの下に避難して、動こうとくれません。天井が落下する危険性だってあります。仕方がないので、一緒にテーブルの下に避難しましたが、もっと強く言って外に避難させるべきだったのではないかと反省しています。

夕方、市民会館を避難所として開設しましたが、当日は 650 人ぐらいの人が避難してきて、玄関の二重扉のところまで人があふれていました。そのうち電気が止まり、水洗トイレが使えなくなってしまいました。近くの学校のプールからバケツを借りて水をくみだし、トイレに使用することにしました。受水槽に 20 トンの水がありましたが、ポンプが 200 ボルトで使用できませんでした。

17日に電気は復旧しましたが、後から、受水槽の水は電気を使わずに使えるということがわかりました。事前に設備のことをちゃんと把握しておくべきでした。



インタビュー日：2012年9月23日

気仙沼市 40代 男性 鉄工所社長



職員の安否確認に1週間

（作っておくべきだった連絡網）

静岡県静岡市の造船所に出張に出かけていて、気仙沼に帰る途中で地震に遭いました。ラジオをつけると、これから10メートルの津波が到達すると警報が流れていました。話し半分・・・せいぜい3メートルぐらいだろうと判断して、最初に会社に電話を入れて、社員に避難するように指示をとってから、家族と連絡を取りました。たまたま山の方にある自動車教習所に向かっているという娘と山で合流することができ、気仙沼高校の駐車場で一晩を明かすことになりました。

翌日、社員から携帯メールで写真が送られてきて、ダメージを受けた会社を見たときは「みんな死んでしまったのでは・・・」と思ったぐらいのひどい光景でした。とにかく会社の様子を確認しようと、現場に向かったものの途中のがれきをかきわけなければならず、それはそれは大変な惨状だったのです。

まず、社員の安否を確認するために、電話が通じなかったのでメールアドレスのわかる社員には、メールを一斉送信して、アドレスのわからない社員には、わかる人から転送をしてもらうことにしました。社員全員の無事を確認するまでに、1週間ほどかかりました。

今回のように通信が不通になったとき、連絡網をどうするかを、日ごろからきちっと打合せをしておかないといけないと反省しました。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 60代 男性 造船所相談役



ペットボトルで即席湯たんぽ

中学生がお年寄りに配る

地震発生時は造船所の事務所にいました。海の近くですから過去の経験もたくさんあります。避難警報が出る前に従業員への避難指示を出しました。家族が心配だと自宅に戻る人もいましたが、幹部は残り、船をどうするかの打合せをして、とりあえずもやいからロープを外すことにしました。

幸い、会社の裏が山なのですぐに逃げられると思っていました。しかし、引き潮がすごく、これは今までの倍の津波が来ると直感して、作業は中断して山に避難することにしました。

裏山で一晩過ごして、翌日は集団で沢を4つ越えて、避難所となっている中学校へと向かうことにしました。そこは、翌日が卒業式だったため、多くの学生が残っていたのと、近くの老人ホームから避難してきた人たちであふれていました。

中学生たちが、まきをかき集めてきて火をたき、それを利用してペットボトルを使った即席湯たんぽを作り、お年寄りたちに配りました。『三人寄れば文殊の知恵』とありますが、たくさんの方がいれば、いろいろなアイデアが浮かぶものです。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 40代 男性 造船所社長



漁業を支える造船業

〈 団結して復興を目指す 〉

漁業が基幹産業の気仙沼にとって、造船所関係の事業所は、1つ1つの事業所をみると、決して規模は大きくないのですが、事業所全体として、気仙沼にかかせない業種となっています。私もその中の1つの事業所として、造船所を経営しています。

結局、会社は2階のテーブルの下まで水に浸かるという被害を受けました。この未曾有の災害に気持ちもなえて造船所をたたんでしまうことも、脳裏によぎりましたが、ここでくじけているわけではありません。

ダメだったらダメでもいいという気持ちで、とりあえずは復旧をすることにしました。そのためには、造船所関係のみんなが一緒になって復旧しないと仕事は再開できません。

地盤沈下したところを、元に戻すにしても今の段階では投資もできません。造船所を含め、鉄工所、電装会社、エンジン整備会社、塗装会社、船具会社が1か所に集まり、一緒に協力をすれば復興もできるのではないかと、今では考え始めています。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 50代 男性 電装会社社長

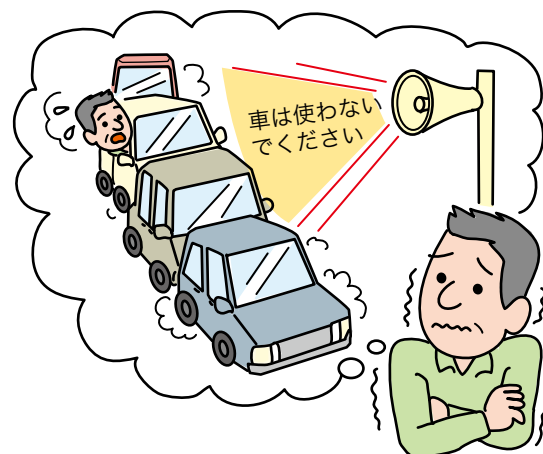


避難に車を使うなの意味 渋滞で実感

地震のときは、会社近くの駐車場にいました。すぐに会社に戻ると、有線放送では6メートルの津波が来ると、注意を呼びかけています。そこで、従業員には気仙沼小学校に避難するように指示を出しました。残った我々は事務所の3階に上げられる貴重品や書類などをできるだけ持ち出したのでした。パソコンや書類を持ち出すのにおよそ20分かかりました。津波到達までが40分でしたから、本当にギリギリのところでした。

自動車を使って避難しましたが、途中防災無線から「車は使わないでください」とさかんに放送が流れてきます。実は、あのとき、とっさには私自身はどういう意味かが理解できませんでした。でも、そのまま進むと道路がみるみる渋滞してしまいました。先ほどの放送の意味がやっと理解できたのです。

幸いにも、避難場所は至近距離だったので着くことができましたが、あのまま運転中に津波の被害にあったらと思うとゾッとします。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 40代 男性 鉄工所社長



2週間後に社員集合

（まずがれき撤去から事業の再建へ）

私の会社は、港町の岸壁の真前にありました。震災当日は、出張に出かけるため会社には出ていませんでした。この震災で会社は1、2階が破壊され、辛うじて3階だけが残りました。

社員の安否の確認は、10日ほどかかりましたが幸いにも全員無事でした。少し落ち着いた3月24日に社員に集まってもらい、今後の対策を話し合いました。

まずは、がれきの撤去をしないことには、前に進めません。従業員には、長靴とスコップを持参してもらい、水道も出なかったので水を確保できる人にはプラスチック製タンクで持ってきてもらうことにしました。電気が使えないので、作業は9時から15時までとして、4月から本業を開始という目標をたてて頑張りました。家を流された人もいましたので、無理をせずの作業と決めましたが、中には1時間歩いてきてくれた従業員もいました。

今回の地震で会社は大きなダメージを受けましたが、従業員全員が無事だったことが何よりでした。物は壊れてもまた元に戻りますが、命は二度と戻りません。自分の命を守ることが一番大事です。また、災害時に全従業員が会社にいるわけではありません。一次避難はばらばらでも、二次避難の場所を徹底させることも今回大切だとわかりました。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 50代 男性 電装会社社長



従業員は解雇せず あきらめないで会社再開

私は、電装会社を経営しています。震災後はがれきで道路が遮断されて、自衛隊以外は立入禁止という状態だったので、会社には4日後に行くことができませんでした。

この仕事は一人前になるのにだいたい10年はかかります。従業員は解雇という形をとり、失業保険をもらってもらおうということも考えましたが、一度解雇してしまったら次の採用は大変です。一人娘を亡くした人、母親を亡くした人と被災した従業員はおりましたが、幸い従業員は全員無事でしたので、当座の資金として10万円を支給して、会社を再開する決心をしました。

当面は、電気が通じなかったので、10時から12時までの営業です。発電機を知り合いから借りて川から水のくみだしをして、会社の泥かきから始めました。

4月に入り、モーターを直してほしいという依頼があちこちから入るようになりました。モーターを直すには、分解した部品を真水で煮沸しなくてはなりません。ヒーターも必要になります。そんなとき、横浜の同業者から無期限で非常用発電機の貸出しの話が飛び込み、4tトラックで運んでいただきました。水産庁からも補助金が出て、運転資金はかなり助かりました。

とにかくあきらめずにやっていけば、何とかなるものだと思います。



インタビュー日：2012年9月24日

気仙沼市 40代 男性 漁協職員



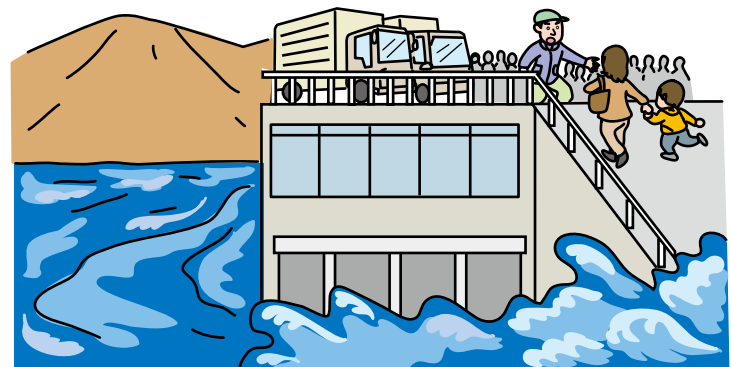
海沿いの高い建物に避難

冷静な判断で命助かる

海沿いにある漁業組合の事務所で地震に遭いました。1階は魚の水揚げ場、2階は事務所。3階が駐車場です。3階には幸いにも水が来なかったため、一時期千人の人が避難してきました。ある親子が、普通なら、山に向かって逃げるところをとっさの判断で海に向かって逃げてきて、この駐車場にたどり着いて助かりました。山に向かって避難していたら、もしかしたら津波にのまれていたかもしれません。ほんとに危機一髪でした。

自宅も、山の上でしたので無事でしたが、妻の両親の安否確認をとることができませんでした。翌日から確認作業をするのに、高台にある我が家からは、どうしても車を使わなくてはなりません、ガソリン購入に何と3、4時間並ぶという状況でした。

これまで住まいも職場も高台でしたので、津波に対しても安心という気持ちどこかにありました。でも今回のような想定外の津波が来たら、安全は保障されません。これからは、職場でも家庭でもあらゆることを想定しての避難訓練が必要だと思いました。それと山に向かわず海に向かって避難して難を逃れた親子のように、機転を利かせて冷静な行動がとれるように日ごろから訓練したいものです。



インタビュー日：2012年9月22日

気仙沼市 40代 男性 漁協職員



事前に見ていた津波のビデオ でも人ごとで自覚なし

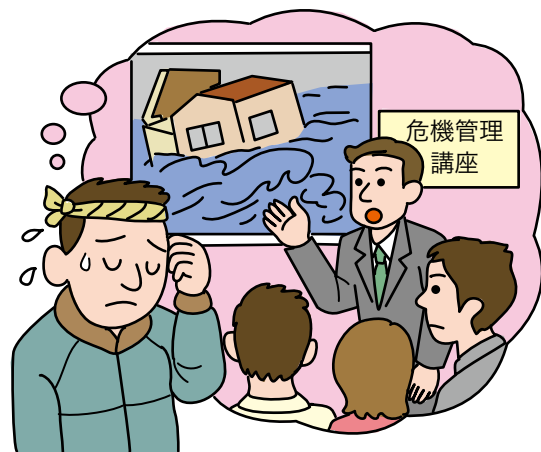
仕事場に戻ったときに地震に遭いました。警報も鳴りましたが、1年前にチリ地震の津波を経験していますし、ここは高台だから、大丈夫だろうと勝手に信じていました。「水がここまできました」という大昔のチリ津波のときの表示もふだんから見て知っています。そのときのいろいろな話も聞いていました。でも、正直そんなに大きな地震は来ないだろうという油断がどこかにありました。

以前、会社で危機管理の講義を受けました。でもこんなことは現実に起こるとは思っていませんでしたし、仕事上でも、生活上でも油断がありました。

5、6年前には、津波発生を想定したビデオも見ています。何と、そのときの映像はまさしく今回と全く同じ状況でした。

いろいろと防災関連のことを学ぶ機会に接していながら、まるで人ごとのように自覚がありませんでした。昔のチリ地震を経験した先人たちが貴重な資料を残してくれたことを無駄にはできません。

これからは、職場で定期的に地震・津波の映像を上映して、各自もっと防災意識を高めていかなくてはいけないと思いました。



インタビュー日：2012年9月22日

気仙沼市 50代 男性 漁協職員



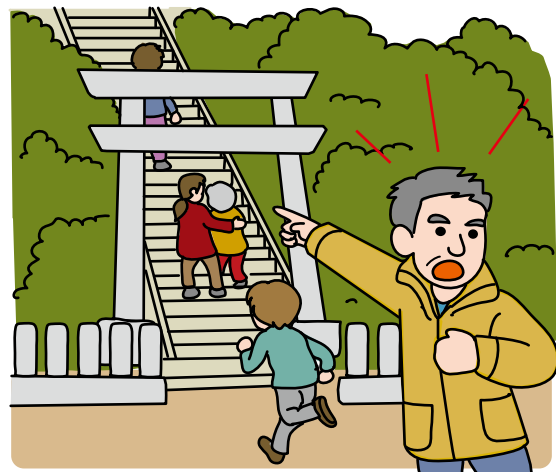
自治会役員として避難誘導

（もう少し呼びかけたかった高台避難）

私は自治会の役員をしていましたので、外に出て、神社への避難の誘導と交通整理をしました。30分ぐらいで白い波が襲ってきました。結局家は、2階だけ残り後は流されてしまいました。ただ「助かって良かった！」と思いました。もともと180世帯あったところでしたが、残ったのはたったの60世帯となってしまいました。

この地区では、度々避難訓練もしていました。避難経路の案内図も素晴らしいものでした。それなのに亡くなった人がいたのは残念です。もう少し多くの方に、高台に避難するように呼びかけていたらと思うと胸が痛みます。

まずは、どんなことがあっても高台に避難することです。この経験を伝え続け後世に生かしてほしいです。



インタビュー日：2012年9月22日

気仙沼市 40代 男性 漁協職員

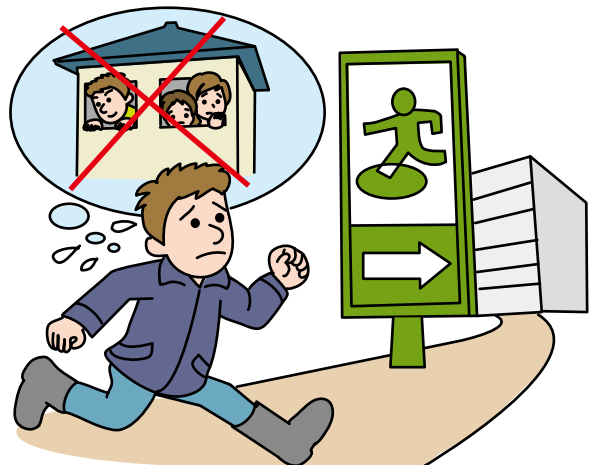


屋根に避難し九死に一生 甘かった想定

地震のときは、会社にいました。自宅が川沿いにあったので家族のことが心配で、4キロの道を自転車で走り自宅に戻りました。既に家族は避難した後で、家にはだれもいませんでした。そうこうしているうちに津波、火事と大変なことになり、バルコニーから屋根へと避難しました。屋根の上から見える光景は、人が乗ったまま流される車や、家が激流にのみ込まれて流されるという信じ難いものでした。かといって助けることもできず、ただただ見過ごすことしかできませんでした。今でも胸がつぶれそうになりますし、半年間は夢でうなされました。

ここももう危険だと思い、ちょうどその場にいた4人と助け合いながら、ふだんなら歩いて15分ぐらいのところを1時間かけて中学校に避難しました。3日目に家族の安否は確認できました。震災2日前にたまたま津波が来たら2階に逃げようと話し合いをしたばかりでしたが、今回の地震はそんな避難では駄目なことがわかりました。

「想定外」を考えて、日ごろから家族と話し合い、避難場所をきちっと決めておくことです。そして、迷わずにその避難場所を目指すことです。まずは自分自身の身を守ることです。



インタビュー日：2012年9月22日

気仙沼市 40代 男性 漁協職員



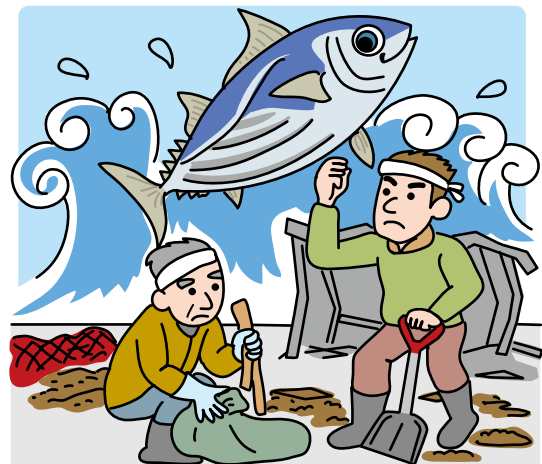
カツオの時期に再開するぞ！

無我夢中の3か月

私が勤める事務所は、たまたま1年前に老朽化と耐震補強をしなければということで移転をしていました。そのため、被害も少なく翌月の4月6日には一部を再開できたのです。ただ電気が使えなかったので、電気の使えるところに必要最小限のものを持って引っ越しをして事務処理を行いました。

壊滅的な状況の中でも、だれかが音頭をとって、次へのステップを踏み出さなければなりません。それを全員で「カツオの時期には再開するぞ！」と決めたのです。こうした目標があればこそ、皆で一致団結できる。無我夢中で頑張れたのも、目標があったからなのです。

日々の労力がかかりますが、今後のことを考えてすべてを高台に上げ、被害が少ない施設にしようと思いました。しかし、魚を加工するとなると冷凍庫が必要になるし、トラックなどの置場の問題も出てきます。更に、人の流出で働き手がいなくなっていました。震災前は水産にかかわる人が7割いたのが、今は復興に関する仕事に雇用の場が移ってしまいました。また、親が若い世代には危険な目に遭わせたくないという考えで、若者が都会に出たまま戻ってこないという状況もできてしまいました。今後の復興を通して、若い人たちが働きたくなる安全な施設を作っていかななくてはならないと思っています。



インタビュー日：2012年9月22日

新地町 60代 女性 主婦

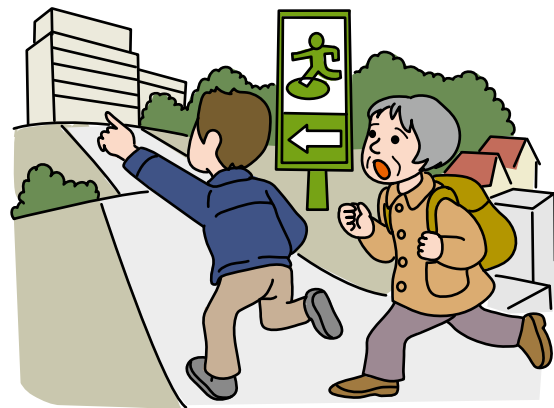


予想もしなかった巨大な津波
 毎日見ていた看板で命助かる

私の住む地域では、地震や津波の可能性は早くから指摘されていました。でもまさかあんなにも大きな規模の津波が来るとは思ってもいませんでした。万一津波が来ても庭先くらいかなあという感じ。だから海辺の暮らしを大いに楽しんでいました。新地の海辺は本当にすがすがしくていいところ。大好きな場所でした。

地域の電柱に、避難場所であるコミュニティセンター（コミセン）の場所が矢印で示されるようになったのは震災の3、4か月前だったと思います。毎日見るこの看板のおかげで、いつしかコミセンの場所を記憶していました。震災当日はこのコミセンに向かって必死で逃げました。どこに逃げればいいのか、知っていたから迷わなかった。助かったのはあの看板のおかげとも思っています。

コミセンに着いてからもしばらくは余震に震えていました。そして「家がつぶされるー！」という夫の叫び声を聞き、あわてて外に出たんです。すると沿岸部の松林の上まで、真っ黒な波が上がっていました。波はみるみる家や車を飲み込んで、そこまでは来ないだろうと私たちが一つの目安にしていた国道6号線をも軽々と越えました。本当に怖かった。でも、命があって本当によかったです。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 自治会長

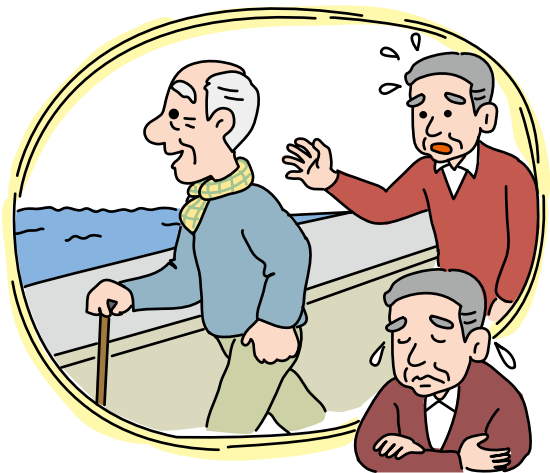


津波を見に行き、 帰らぬ人に

地震直後から、自治会長としてほかの役員と手分けをして地域を見回りました。当初はそれほどの危機感を持たずにいましたが、とにかく避難を促すため1軒1軒回りました。最後の最後に、母がいるはずの自宅前に来たときです。突然、巨大な津波がすぐそこに迫っていることに気がつきました。私はあわてて車をリターンさせ、波に追われながら逃げました。結局、母を助けることはできませんでした。母を殺したのは自分ではないか、という思いは、今も完全に消すことはできません。

あの地震を振り返ると、昔の津波を経験していた人ほど甘く見積もっていたのではないのでしょうか。生前、母も昭和30年のチリ地震津波を覚えており、津波は庭先までしか来ないと安心していただけでした。隣家の夫婦も同じ。チリ地震津波は、一度潮が引いてからやってきたそうです。潮が引いた海岸には大量の魚があがり、皆が喜ぶ様子を、この家の人はずいぶん前から珍しかったカメラで撮影していました。

潮が引くものと信じて疑わなかった長老たちはほかにもたくさんいたようです。中には海を眺める様子が目撃されていた人も……そして帰らぬ人に……。時間が戻るなら彼らを止めたい。どうか津波警報が出たときは、海を見に行かないでください。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 70代 女性 農業

震災以来、避難用リュックに下着常備

我が家はいちご農家で、震災が起きたのは収穫したいちごをパック詰めしているときでした。とにかく揺れがひどく、とっさに竹やぶに逃げ、辺りを見渡すと、土蔵の壁がドサッと崩れ落ちました。これは大変だ！ 今までにこんなことはなかった、と思ったとき、母の話を思い出しました。母は昭和8年の津波を経験しており、「地震が来たら逃げろ」と、繰り返し言っていたんです。そこで家族や近所の親せきに「逃げろ！ 逃げろ！」と言って回って、自分も急いで避難しました。

家はすべて津波に流されました。その後2か月は避難所生活でしたが、避難したころ、一番困ったのは着替えがないこと。特に下着は深刻で、5日間おふろに入れずとても不快な思いをしました。寒い季節だったからよかったけれど、あれが汗をかく季節だったらどうなっていたことかと思います。

震災5日目になって、義姉の家でおふろに入れてもらおうと思えたのは、下着が支給されたからです。きれいな下着なしではおふろに入る気にもなれません。

今では、いざというときの避難用のリュックを玄関に用意していますが、その中にはきれいな下着が1組、しっかりと入っています。「非常用持ち出し袋には下着1組を」。これが震災の教訓です。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 70代 女性 自治会役員



たまたま身につけていた 運転免許証が意外なほど役に立った

あの日、私たち夫婦は新地にいませんでした。全国津々浦々を旅して来て、最後に残った山陰の名所を「これが最後の旅行かも」と言いながら2泊3日で訪ねていたのです。3月8日に起こった少し大きな地震を思い、「帰ったら家がなくなっていたりして」と冗談を言っていたのですが、まさかそれが現実になるなんて……。

東日本大震災の発生は飛行機の中のテレビ放映で知りましたが、当日は関西空港近くに戻ることはできず、翌日、日本海側経由で何とか仙台まで戻りました。やっとタクシーを捕まえ新地町の北の宮城県山元町にある義姉の家にとどり着いたのは13日の真夜中。以前の避難訓練のときに、義姉の家を避難先に想定していたことは幸いでした。

その後、自宅のあった場所に行ったときのショックといったら……。土台だけになった我が家を前に、完全に浦島太郎状態。地震を経験しなかった分、受け入れるのに時間がかかりました。

ぼう然自失のまま避難所生活に入りましたが、救いだったのは、夫婦そろって運転免許証を身につけていたこと。新地では役場も農協も郵便局も機能しており、免許証でいろいろな手続きが可能だったのです。常に、免許証やパスポートなど身分を証明できるものを何か持っているといいと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 主婦

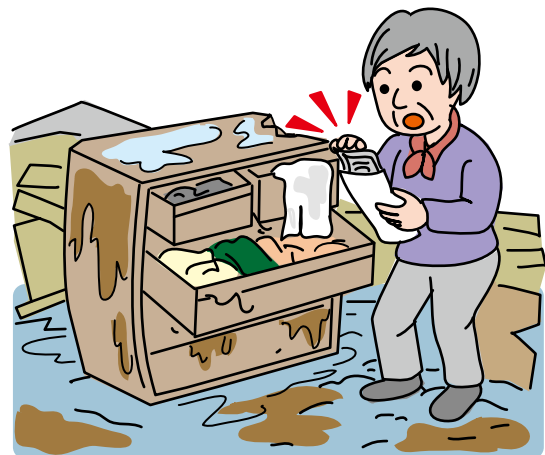


流された整理だんすからへそくりが出てきた！

3月11日、防災無線から聞いたこともないような警報が聞こえたのは、居間に腰を下ろし、新聞を広げたとき。そのうちにもものすごい揺れに襲われ、屋根がわらが落ち始めたときはただごとではないと思いました。それでも揺れが収まったところで一安心し、道路に散らばった隣家の屋根がわらを片付け始めたんです。すると、「何やってるの？ 津波が来るから早く逃げなきゃ」と通りかかった知り合いが叫ぶんですね。そこで初めて津波の危険があると知り、車で逃げました。

高台に避難して津波にのみ込まれる家や車の様子を見てからは、自分が自分ではないような感覚でした。腕が振るえて振るえて運転もままならない。足もとの道路が乾いていることにふと気づいたときに、やっと少し落ち着いたのを覚えています。

結局、家は跡形もなく流されてしまいました。何日か後になって自宅付近を見回ったとき、家のあった場所の裏側に見覚えのある整理だんすを見つけました。海水で膨らんだこのたんすを、裏の家の人にバールでこじ開けてもらい、日常着を取り出しました。それと一緒に、もうすっかり忘れていたへそくりの袋が出てきました。手元に残った袋を見ながら「へそくりはもっと安全な場所にしまおう」なんて、おかしいことを考えています。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 自治会長



仮設住宅でも「禁酒」ルール化 アルコール中毒・トラブル未然に防止

私たちの地域の住民は、最初は避難所に指定されていたコミュニティセンターに避難し、その後、小学校に移りました。ここで生活した2か月ほど、周辺の方々がとてもよくしてくれて、食べるもの、着るものにはほとんど困りませんでした。トイレ掃除などもボランティアの方々が行ってくれました。

地域単位での避難でしたので、そのまま自治会が機能したのが幸いしたのだと思います。私は自治会長として避難所や仮設住宅の運営にあたりましたが、顔なじみばかりでしたから、まとまりやすかったです。

避難所にトラブルがつきものということはいろいろな人から聞いていたので、それを防ぐために最初からいくつかのルールを作りました。その一つは消灯時間で、午後9時に決めました。それまでだったら、夜9時に寝る人は少なかったかもしれませんが、反対する人はいませんでした。もう一つが禁酒です。避難所がスタートして間もなくから、避難所内ではアルコール類は飲まないことにしました。

仮設住宅に移ってからも「禁酒」をルール化したところ、「こっそり飲んでいる人がいる」と報告してくる人もいたのですが、そこは見てみぬふり。厳しくし過ぎて窮屈になるのは避けました。緩やかなルールづくりが平和な避難生活につながったと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 自治会長

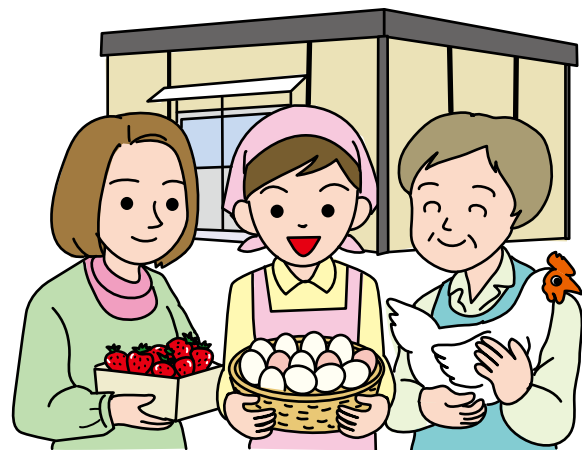


女性パワーで活気ある避難生活

避難所運営は男性ばかりで行うことが多いと聞きますが、男性は仕事を持っている人が多く、昼間はいません。ところが支援物資が届いたり、ボランティアの人たちが来たりするのは昼間が圧倒的に多い。そこで、早くから女性の活用を心がけました。自治会女性部を発足させて節度ある集団生活を目指したのです。女性部のメンバーは3名。私から頼み込んで役員になっていただき、昼間の活動をサポートしていただきました。女性の細やかな心配りで避難所運営はとてもうまくいきました。

自治体女性部の活躍は、仮設住宅に移ってからも続いています。すっかりまとまりができたため、何かしようと声をかければ必要なくらいのメンバーがすぐに集まる。人が集まるから活動も活発化します。

ニワトリを飼って卵を収穫して幼稚園や小学校にプレゼントしたりもしています。2012年秋にはいちごのハウス栽培も始めました。いちご農家の人々を指導者に、ハウスを作り、苗を植えました。ハウス設置に関する役所への申請なども女性部が仕切ってくれました。収穫できた暁には、お世話になった周辺地域の人々にプレゼントしたいと思います。これからも女性のパワーが頼りです。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 自治会長

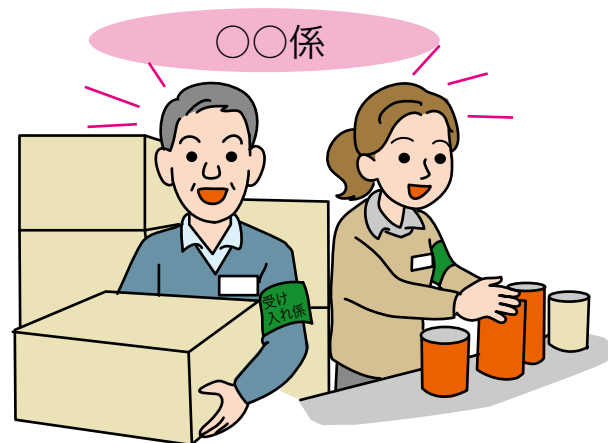


意外なほどの言う避難所の「肩書き」

避難所ではなるべく役割分担をし、「〇〇係」と役職をつけ、その役割を明確にしました。例えば支援物資が届いたときなどに、だれが受け取るかは重大な問題です。あらかじめ決めておかないと、後々、だれが受け取ったのか、どこに置いたのか、責任者はだれかといった話になりがちなのです。スペースを作るためにだれかがものを移動したりすることもしばしばありますから、荷物の管理は重要です。特に日常生活とは違い、非常時のときは勘違いも起きやすい。そうならないために「受け入れ係」を決めておくのです。こうすれば作業はスムーズだし、物資の管理もしやすく、届ける側も安心です。こうして小さな役割でも「係」にするのは、避難所運営の一つのコツだと思います。

私たちの避難所ではこうした役割のほか、順序なども大切にしました。避難して1か月くらいしたころ、洗濯機が支給されたのですが、これも使う順番をきちんと決めて譲り合って使いました。おかげで大きなトラブルもなく、避難生活を送ることができました。

よくルールづくりが肝心だと言われますが、責任を明確にすることも大変大事です。団体生活の運営をスムーズにしていくコツがここにあると思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 主婦



お財布、
保険証、
おくすり手帳……
いつものバッグが身の助けに

地震が起きたとき、すぐに「逃げなければ」と思いました。避難場所は指定されていたので迷いませんでした。それでも、避難するとき私が持っていたのは、いつも使っている小さなバッグだけでした。家を飛び出すときに、なぜか「そうだ！ 免許証！」とだけはひらめいて、このバッグと一緒にあわてて持ち出したのですが、ほかのことは何一つ考えられませんでした。本当に着の身着のまま、夢中だったのです。

避難後、家はまるごと津波に流されてしまいましたから、手元にはこのバッグ以外残りませんでした。ただ、この中にお財布、保険証、診察券、おくすり手帳などが入れっぱなしになっていたのが幸いでした。薬自体は持ち出せませんでした。後から病院に行って、処方してもらうことができました。保険証や免許証は身分証明書代わりにとなり、後々本当に役に立ちました。大事なものはひとまとめにしておく、いざというときにさっと持ち出せると思います。

欲を言えば、お財布の中にもう少し多めに現金を入れておけばよかったかも。ただし、いったん逃げたら、お金をとりに家に戻ったりしては絶対にいけません。それで亡くなった人がたくさんいるのですから。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 主婦



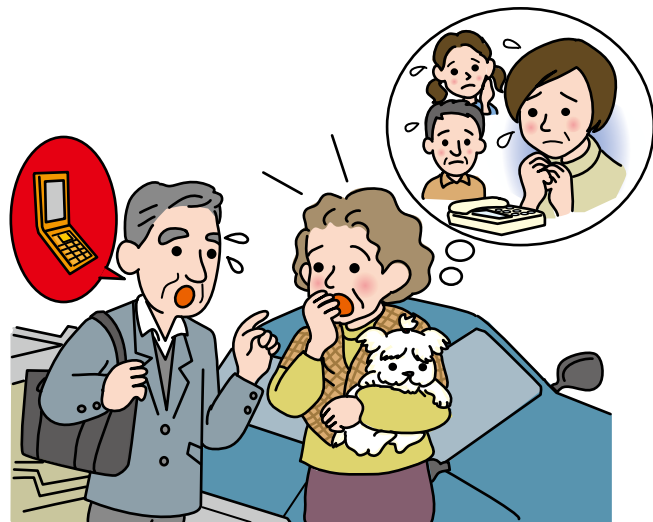
忘れちゃいけない！

離れた家族に無事の連絡

地震が起きたのは家で洗濯物をたたんでいるとき。2階に中学2年の孫がいたので助けに行こうとしましたが、揺れがひどくて駄目でした。少し収まってから恐る恐る階段を上ると、孫は青白い顔でテーブルの下にもぐっていました。そこに息子が帰宅。私は息子に促されるまま孫と愛犬を車に乗せてメチャクチャになった家を脱出しました。ほどなくして息子の嫁と合流でき一緒に高台を目指しました。ようやく落ち着き、とりあえず家に帰ったのは夜になってから。その日はいつでも移動できるようにと、車内で一夜を過ごしました。息子は役所勤めのため終日別行動でした。

翌朝、目を覚ましてぼんやりしていると、夫が帰ってきました。夫は埼玉に出かけていたのですが、地震のことを知ってあわてて帰宅したのです。私たちのことを心配しながら、1人で、通行可能な道路を探し探しやっとたどり着いたようで、ひどく疲れていました。考えてみると、私は逃げるのに精一杯で、夫に連絡するのをすっかり忘れていたんです。横須賀で暮らす妹も寝ずに連絡を待っていてくれたと後で知り、本当に悪いことをしたと心から申し訳なく思いました。

時間が戻るなら、逃げて落ち着いた段階で、まずは離れている家族に無事を知らせたいと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 主婦

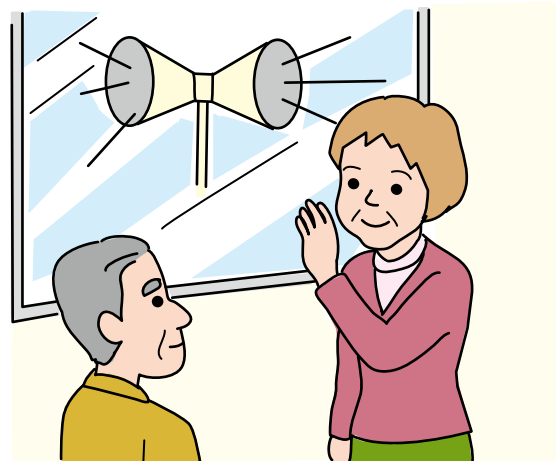


窓に耳を押し当てて聞いた防災無線
御近所のお役に立ちたいと情報求める

地震発生直後から、津波発生の警告や、高いところに避難するよう呼びかける声が、防災無線を使って町中に流れていたようですが、私には全然聞こえませんでした。やはりパニック状態になっていたのだと思います。でも、少し落ち着いてからは、努めて聞くようにしました。最初に聞こえたのは、ボランティア参加を呼びかける町長の声でした。それですぐにナビボラ（道案内ボランティア）を始めました。

家は何とか生活できる状態にあり、親せきと一緒に大人数でしばらく暮らしました。原発事故が起こってからは窓もドアも閉め切っていましたが、防災無線がかすかに聞こえたときだけは細く窓を開け、そこに耳を押し付けるようにして内容を聞き取りました。どこにどんな人が避難しているのか、どんな支援が求められているのか。そういうことを私はほとんど防災無線で知り、できるだけ出かけてお手伝いをしました。新地に越してきて約8年。新参者の私たち家族を受け入れてくれた御近所の皆さんのお役に、こんなときこそ立ちたいと思って一生懸命働いたのです。

今では役場に申請し、室内でも聞こえる防災無線を配備してもらっています。今後も何かあったときには無線で情報を得て、避難やボランティア活動に生かしたいと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 団体職員



言えなかった「おふろをどうぞ」の一言

私の暮らす地域は地震と津波で大きな被害を受けたのですが、自宅は高台にあったので何とか無事でした。家族も全員無事で、電気・水道・ガスも大丈夫でした。

しばらくして無線に耳を傾けると、毛布がほしいと聞こえたので、急いであったけの毛布を近くの避難所に届けました。そこで食べ物が不足していると聞き、家に帰って「早炊きモード」でごはんを繰り返し炊いて、今度はおにぎりを届けました。

その後、知人を探しに避難所を転々としているところを消防団の息子に会い、その場で炊き出しの手伝いをするようになったのです。次に、落ち着く間もなく老人ホームで1週間ほど見守りボランティア。そのうちに災害ボランティアセンターが立ち上がったので申込みに行き、そのまま3、4日、仕分けボランティアをしました。

こんな感じで行く先々で求められるまま、できる限り支援活動を続けたのですが、心残りなのは、支援者側にいた被災者を気遣ってあげられなかったことです。一緒に支援活動をする仲間に、「おふろに入りに来ませんか」の一言が、どうして言えなかったのか悔やまれます。自分が被災しながらも懸命に働いている人はたくさんいます。そういう人への配慮こそ忘れてはいけないのだと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 社協職員



災害ボランティアセンター 立ち上げは経験者に任せて正解！

自宅は日ごろから家具の固定などをしてあり無事でしたが、家族は大事をとって車で寝泊まりしました。私は地震発生から3日間、避難所となった役場に泊まり込んで連日炊き出し。皆で材料と道具を持ち込み、水などが不足する中での作業でした。

自衛隊の協力を得て、1週間後くらいから泥出しを開始。同じころ、災害ボランティアセンター（ボラセン）立ち上げを考え始めましたが、私たち社会福祉協議会の職員は災害ボランティアの経験も知識もなくお手上げ状態。それでも立場上やるしかないと考え関係機関に相談すると、多くの方々が協力してくれました。

福島県社会福祉協議会、全国社会福祉協議会、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）などの主導のもと保健センター休憩室に準備室を設けたのは3月下旬。ここで組織図を作り、活動の流れを確認し、各種書類も作りました。既存の空き施設がなかったため、支援Pの資金で高知県から7.5坪のコンテナハウスを5棟、搬入・設置していただきました。最初は携帯電話で受付作業。4月末にNTTから複合機が無償貸与され、正常な活動状態になりました。

経験・知識ゼロの中ボラセンの立ち上げができたのは、経験者の協力があったから。無理せず経験者に任せたからスムーズな立ち上げができたのだと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 社協職員



お見送りは「行ってらっしゃい また来てね」

4月下旬に災害ボランティアセンター（ボラセン）を立ち上げセンター長になりました。しかし、その時点で住民は「ボラセンって何？」という状態。そんなわけでボランティアはニーズの掘り起こしから始まりました。

ポスター、チラシ、戸別訪問の効果でボラセンの存在が浸透し、ニーズが高まり、ゴールデンウィークごろにはピークに。社会福祉協議会、経団連、連合などの協力でボランティアバスを運行し、ピーク時には1日300人くらいのボランティアが来てくれました。スタッフ支援では日本YWCAや地元ボランティア連絡協議会にもとてもお世話になりました。ボランティア、支援スタッフには、「さようなら」は禁句とし、「行ってらっしゃい、また来てね」と見送りました。

夏には豪雨により新潟や福島の一部が被災。私たちのボラセンからは資機材を提供しました。支援を受けるばかりでなく、同じように苦労している人たちを、できる限り支援する姿勢が大事だと思います。

「災害ボラセン」は、8月10日に「生活支援ボラセン」に変わりました。被災直後のがれきの様子から、災害ボラセンの活動は2年以上続くと思いましたが、8月に終わったのは驚きです。北海道から沖縄まで、全国から集まってくださったボランティアの皆さんや、関係機関の協力に、心から感謝しています。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 男性 社協職員



手厚い支援に感謝し自立を目指す

新地町では現在も多くの団体に様々な支援を継続していただいています。現地でのボランティアもさることながら、福島産の産品を各地のボランティアが販売し、その売上金を寄附してくださるといった活動には胸を打たれます。小学生の長期滞在を受け入れていただいているところもあります。今回の災害を通してつながりの深まった自治体も多く、強いきずなというものを感じています。

今考えているのは、「いつまで支援を続けていただくのか」ということ。そしてどうやって自立すべきかを自治会長や社会福祉協議会などで集まり話し合っています。外部からの支援はありがたいのですが、自治体である以上、自立が不可欠です。きずなを大事にしつつも、自治体同士の交流を続けながら、その道を探っているところです。

街づくり、住宅整備、住民の仕事の確保、風評被害の払しょくを含めた農業再開、スポーツ振興など課題は山積しており、それぞれ具体的な計画を策定中です。いまだに津波のつめあとが残る新地ですが、立ち直りつつあるのは確かです。笑顔で過ごせる時間も増えてきた町民とともに、安全で住み心地のいい町づくりを目指して力を合わせていこうと、新地の風景を見るたびに心に誓うのです。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 民生委員



96歳女性を救出するも、おむつを忘れて一苦勞

知人宅で地域活動の打合せ中に震動のようなものを感じ、「これって、地震？」と2人で顔を見合わせて、ガスの元栓を切り、窓を開けました。そうこうしているうちに激しく揺れ始めたので、急いで畑に向かって飛び出しました。その直後から、屋根がわらは落ちるわ、家具は飛び散るわ、ドアは外れるわで家はもうメチャメチャ。私の車も屋根がわらでボコボコになりました。それでも試しにエンジンをかけてみると、かかった！ 泣き出した知人を軽く慰めた私は、その車で急いで帰り、地域を見回りました。町内は案外、落ち着いていたのが印象的でした。

民生委員の私には気になる人がいました。近所のちょっと頑固者の女性。家族はいますが日中は独り。玄関にかぎがかかっているのはわかっていたから、寝室の窓をたたき、声をかけました。「今日だけは私を娘と思うことを聞いてね」と言うと、だまってうなずいてくれました。

夜になって帰宅した家族に女性を引き渡したのですが、それまでの間、すごく苦勞したのがトイレ介助でした。その女性が介護用のおむつを使っているのは知っていたのに、私が持ち出し忘れたのです。「災害時に脱出するときは介護用品を必ず持ち出すこと」。これが今回の教訓です。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 旅館経営



旅館での避難者名簿が家族の再会に一役

私が経営する旅館は高台にあるため、地震直後から次々に避難者が押し寄せてきました。ガス・電気・水道が幸いにも無事だったので、2日間ほどとにかく避難者の受け入れと食事の確保に必死でした。

避難者の名簿づくりを始めたのは地震2日後の3月13日。「うちの娘来てない?」「おじちゃん、いないかしら」と、次々に家族を探す人が現れたのを見て、「これはいけない」と名簿づくりを始めたのです。お名前や住所を書いていただくと、意外にも遠方からの避難者も多いことがわかりました。記入してくださったのは13日だけで60～70人。11、12日はもっといたかもしれません。出張で福島を訪れ帰れなくなったサラリーマングループ、旅行で来ていた御夫婦などもありました。名簿にあったお名前のある避難所で叫んでみたら、その方のおばあちゃんが「はーい」と手を挙げてくれたときはうれしかった。この名簿によってたくさんの人たちの所在がわかり、家族の再会に結びついたこともありました。

地震直後の情報のない中で、離ればなれになってしまった御家族の心中を察すれば、もっと早く名簿を作ればよかったと思います。そこまで思いが至らなかったことを、お客様の命を預かるホテルの経営者として反省しています。これから、緊急マニュアルに名簿作成の一項を加えていきます。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 旅館経営

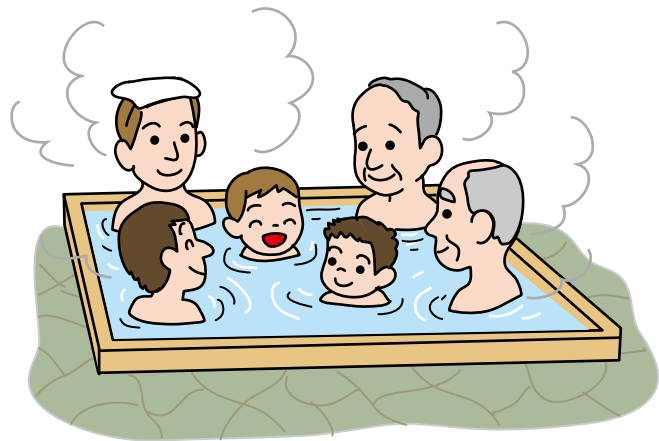


被災者も支援者も温泉でホッと一息

私が経営するホテルは温泉を併設しており、日帰り入浴もできます。近くの鹿狼山（がろうさん）への登山口になっているほか、昨今の温泉ブームで平日でもにぎわっています。震災当日の金曜日も、数多くのお客様が利用されていました。ふだんは、相馬平野から海まで見渡せるのんびりしたこの温泉が、シャンプーまみれの人、泣き叫ぶこどもでパニックになりました。

震災発生2週間でボイラー室の安全確認ができ、それからはバスで送り迎えをし、避難所からの入浴の受け入れを始めました。1人30分前後ずつくらの交代制だったので十分ではなかったのですが、お風呂が被災者の方々の安らぎに少しでもなったと思うとうれしいです。湯上がりで上気して、震災という恐怖から一時でも解放された被災者の方々の顔を今でも思い出します。

また、いつのころからか、自衛隊の隊員の皆さんも入浴に来られるようになりました。駐屯地に行けばお風呂はあるのですが、車で往復2時間かかる。困っていた矢先にここを見つけたと喜んでおられました。それでも「被災者ではないので」と遠慮がちに、素早く入浴を済まされる様子には頭の下がる思いでした。厳しい活動が続く中、温泉で英気を養っていただけたのは本当によかったと思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 社協職員

自家用車内の避難者を数え忘れ、みそ汁が不足し大騒ぎ！

地域の炊き出し班長の私は、避難所となった体育館で、震災当日から炊き出しを開始しました。地区の人口も考慮して、体育館内の全員に行き渡るように400人分のみそ汁を作りました。第一に子ども、次に高齢者、最後に大人という優先順位が自然にできあがったときは、「やはり日本って、すごいなあ」と感心しました。

ところが、みそ汁に並ぶ行列はいつまでたっても絶えず、しまいには足りなくなりました。寒い時期ですから、当然身体の温まるスープやみそ汁はだれもがほしがり、2杯飲む人があるのかな、と思ったぐらい。実は駐車場に避難していた人たちを数えていなかったのです。見込みが甘かったとはいえ、「みそ汁が足りない!」「おれの分はないのか!」と怒鳴られるのはすごく切なかった。でも、落ち着いて頑張り、結局600食を調理して、希望者全員に配ることができました。

中学校のような広い敷地の避難所は、避難者の正確な人数を把握するのは難しいでしょう。でもせめて、体育館のほか、車で来て車内にいる人くら今では確認するべきでした。避難所はあっても、いろいろな理由から室内に入らず、自家用車で過ごす人はたくさんいるんですね。これからは、そういう人たちのことも忘れません。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 社協職員



被災者ながら必死に炊き出し

事前の訓練役に立つ

震災の少し前に地域で防災訓練があり、日赤のハイゼックス（非常用炊き出し袋）を使った炊き出し方法なども学んでいました。また、私は地域の炊き出し班長になっており、使命感から、自宅が地震でメチャメチャになりながらも、避難先の中学校で炊き出しをすることにしました。

とはいえ道具も材料もありません。困っていると、だれともなく協力者が始まると、野菜、調味料、大なべ、井戸水、まきなどを集めてくれました。そこらじゅうに畑があって採り残した野菜が1年中ころがっていること、多くの家庭でみそなどを備蓄していること、水を井戸からくめたことは私たちの地域の強みだと思います。

1日目は避難所の分の炊き出しをし、2日目以降は多めに作って自宅にいる人たちにも届けました。配達が集落ごとに担当してもらいました。今回の炊き出しでは地域の特性や事前の訓練がとても役に立ちました。でも、炊き出しのノウハウを知っているだけでは作業はうまく進まなかったと思います。

防災訓練など日ごろの活動を通じ、「この人だったらこういうことができるのではないか」と、何となく把握しておいたのはよかったかもしれません。あとは地域の人たちに譲り合いや助け合いの気持ちがあったことが一番の幸이었다と思います。



インタビュー日：2012年9月19日

新地町 60代 女性 社協職員



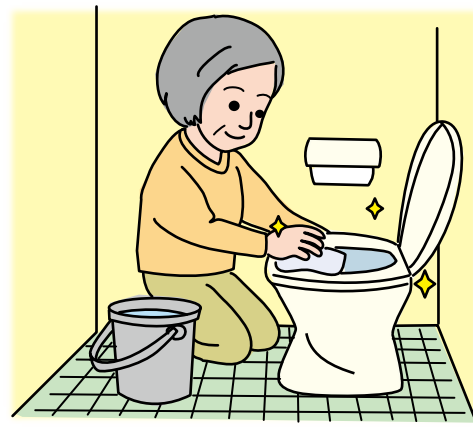
トイレ掃除はこまめに。 きれいな方が汚されない

避難所ではトイレが問題になる！ このことはほかの地域の災害報告などから繰り返し伝え聞いていました。汚れたトイレを使うのはだれにとってもとても不快ですし、衛生面からもよくありません。

だから避難先の中学校では、常にトイレを気にかけていました。プールの水をくんだ衣装ケースとバケツをトイレの近くに並べ、使用後はバケツで流す。そして空になったバケツには衣装ケースから水をくんでおく。紙は流さず、個室に1枚ずつ設置したビニール袋に捨てる。水が少なくなったら衣装ケースにくみ足す。こうしたことを、避難所の開設当初からルールとして決めました。

更に、時間を見つけてはこまめにトイレ掃除をし、清潔を保ちました。特に当番制などにしたわけではなかったのですが、とにかくできるだけきれいに保ったことで、少し汚れたときにさっと掃除してくれる人もいたのではないかと思います。汚れ始めを放っておいてしまったら限りなく汚れていっただけだったのは間違いないでしょう。

おかげで結構きれいに使ってもらうことができました。「トイレ使用はルールが大事。清潔にしておくのと汚されにくい」ということを体験から学んで実感しています。



インタビュー日：2012年9月19日



大きな手提げ袋が避難所生活で大活躍

避難所の大小にかかわらず、集団生活では荷物がばらばらにならないように収納できる入れ物が必要です。特に今回は避難所生活が想像以上に長引いたこともあり、荷物の整理に苦労した方々は多かったようです。

着の身着のまま逃げ出したため、バッグ類を持っていなかった人も多く、「大きな手提げ袋がほしい」という声をあちこちで耳にしました。手提げ袋がいくつかあると、荷物を仕分けして入れておけるし、必要なときにすぐに持ち歩けるので箱などよりも便利なのです。

リュックがほしいという声も多かったです。貴重品は絶えず身につけておかなければいけません、両手は自由にしたい。だから背中に背負うリュックが重宝なのです。支援物資として届いた大小のバックやリュックはあっという間になくなりました。袋類がこんなに貴重とは、今回の震災で初めて知りました。

今後、何かあって避難しなければならないときには、軽くてかさばらず丈夫な手提げ袋をいくつか持ち出したいと思います。実は震災前は非常用持ち出し袋も何も用意しておらず、「これではいけない」と強く思いました。これからは必要なものをひとまとめにしておき、いつでも持ち出せる準備をしておかなければと思っています。



インタビュー日：2012年9月19日

浦安市 40代 男性 市役所職員



たくさん届いた支援物資

くずりつつた市民への配布

あの日は市のイベントで都内におり私は帰宅困難者になりました。市役所に電話してもつながらず、まさか舞浜が液状化で大変なことになっているとは思ひもよりませんでした。翌朝、電車を乗り継いで船橋の自宅にいったん戻り、車で市役所へ向かいましたが、途中の道路が封鎖されていたためう回して、やっと役所へたどり着いたのが翌日の午後でした。

それからは、市民からの問い合わせや給水所などに職員を配置する業務を行いました。断水の報告を受けて各地から水も含む多くの救援物資が到着した後は、防災課のある建物を備蓄倉庫にして、ここを物資配布の拠点にしました。

近隣自治体からの支援は本当にありがたい気持ちでいっぱいになりました。しかし、配布した一部が役所に戻ってくるという事態もありました。その対応にも追われ、むなしさを感じながら処理していました。その後、被災者のニーズを聞いて社会福祉協議会が分配してくれたので偏りはなくなりました。今度はこれを役所で市民のお困り度合いによって適正な配分をしなければなりません。これには実際にこずりました。今は緊急時の対応策マニュアルの整備を進めています。

それと公人でもある自分は非常時には真っ先に市役所へ行き、救援対応をすべきだったと反省しています。今は、日ごろから着替えなどは役所に準備しています。初動訓練の大事さを思い知った3.11でした。



インタビュー日：2012年9月3日

浦安市 30代 男性 市役所職員



ツイッターのフォロワーは600人から12,000人へ

ツイッターの利便性や効果はだれもが知るところですが、浦安市のツイッターは2011年1月に開設したばかりでした。市民からの反応がどのようなものなのか、かなり不安がありました。震災前のフォロワーは600人、震災直後からアクセス数が伸び、最終的には12,000人までに膨れ上がりました。しかし、一般的な情報しか提供できなかったという反省はありますが、浦安市でデマが流れるようなことが起きなかったのはツイッターの威力といえるでしょう。

更に、1日2回のCATVでの情報提供。これを見た市民の方々から、市内の液状化の被害を初めて知ったという声もいただきました。市役所の駐車場に自衛隊が給水活動しているのを見て、「何をしているのか」と聞いてきた人もいたくらいなので、同じ市内でも、地域によって被害状況は全く違ったからなのです。

市民の皆さんがいかに正しい情報をほしがっているか、そして私たち市の職員はいかに正しい情報を発信していかなければならないかを改めて認識しました。ですが、実際には、あの場でそんな風に思う余裕もなく、市内の被災状況を自分の足で駆けずり回って把握していたというのが実態です。今に思えば、情報を一元化し発信していくまでに若干もたつきがあったように思います。



インタビュー日：2012年9月3日

浦安市 30代 男性 市役所職員



市内の新聞社と連携して震災翌日に「号外」を発行

浦安市内には産経新聞社の印刷工場があり、市の広報誌の印刷をお願いしている関係もあって、日ごろからおつきあいがありました。ホームページにアクセスできない人や、テレビニュースには流れない地域の情報を伝えていくためにも、震災翌日に 12 日付号外を発行。市内主要箇所、都内の主要ターミナルで配布しました。ウェブの伝達力は群を抜いて速いですが、広くあまねく伝える、情報を残すという点では、やはり紙媒体には勝るものはありません。

浦安市の停電は長くはありませんでしたが、停電になってしまうとホームページを見ることもままなりません。やはり非常時の初期における情報伝達手段としては、紙媒体が重要な役割を担います。その後、電気がつなげたところで、ホームページは威力を発揮してくれました。東日本大震災発生前では、市のホームページアクセス数は年間 240 万件でしたが、震災発生以降の 3 月 11 日から 31 日の 20 日間で約 180 万件に達したのです。こちらの情報更新も頻繁に、市内の被災状況を掲載しています。これに付随して、防災情報等に関するメール配信サービスは東日本大震災発生前と比較して 5 倍の 4 万人が登録しています。

あとは高齢者の方々やホームページを見ない方への情報提供を考えていけば、おのずと発信の在り方、どこのだれにどのような情報をいかなる方法で伝えていけばいいのかが見えてくると思います。現在、情報発信体制の在り方を見直し、だれもが情報にアクセスできるように進めています。地区ごとにある掲示板に「お知らせ」は必ず掲示しています。



インタビュー日：2012年9月3日

浦安市 40代 男性 市役所職員



自治会への情報伝達 （説明会で自助・共助の機運が生まれる）

地震直後から電話のベルが鳴り響き、電話対応に迫られることになりました。その多くは市内各地区の自治会長さんからのもので、内容も「被害状況はどうなんだ？ 復旧はいつなのか」というものでした。

実際、震災直後は市民に伝える情報が少なく、市役所内も混乱していました。そこで情報を一本化して定期的に発信することを行いました。3月16日に文化会館で81自治会を対象に説明会を実施。これによって、自治会では自分たちでできることはやる、という意見が大勢を占めるようになりました。これには市職員としても内心ホッとしたのです。皆さん、情報に飢えていらしたというのが印象でしたので、被災後1週間もすると問い合わせも落ち着きました。

その後は下水道が使えない地域では自治会で洗濯機を共同購入し住民が使えるようにしました。そうした情報を共有していましたので、洗濯ができない地区から来る人もいて洗濯機はフル回転していたようです。また、老人福祉会館のお風呂を開放したり、ホテルと交渉したり、低価格で入浴できるようにもしました。

私が得た教訓は、自治会の代表者から「情報がほしい」と言われたときに、出せる情報を集めること。また固定電話がつかないところは、紙による情報提供をする。実際、落ち着いてからはFAXで一斉送信しました。日ごろから、自治会と情報伝達方法を細かく共有しておく必要があると思っています。



インタビュー日：2012年9月3日

浦安市 30代 女性 市役所職員



被災者だけど弱音を吐けず

私は保健師で、市の職員向けに健康管理をしていました。介助者が必要な職員や、庁内でけがをした職員の手当などです。職員である私たちには、市民の安全を第一に考えなければなりません。そのために献身的に働く職員のために、安全な場所を確保、健康管理を気遣うことは重要です。それと「市の職員も被災者」であることを、つい忘れてしまいがちですが、家族の安否確認ができない中で、市の業務をこなさないとならないうらさも理解できるからです。

夫婦で市職員だと、学童保育も閉鎖されているとこどもの預け先を探ることが困難でした。いつになったら休めるのか、先の見えない中で業務をこなしながら不安感を抱いていらしたことも事実です。持病のある職員は長期間の薬の処方がないとか、治療中断ということも。食事制限をしている方も大変だったと思います。ぜんそく治療中の職員は薬がなくて発作が起きないかとひやひやしました。

実際、時間外業務は何百時間と続き、市民からの苦情などで精神的ストレスを抱える職員も出始めました。しかし、弱音は吐けない。ふだん事務職の職員が慣れない復旧作業で骨折したケースもありました。また職員間でも衝突が起き、ふだんよかったチームワークに影響が出たところもありました。そこで、日本赤十字社で作成している「災害時のこころのケア」というマニュアルを参考に「健康だより」の号外を発行しました。これは職員にとっても励みになったと思います。



インタビュー日：2012年9月3日

浦安市 60代 男性 自治会役員



指揮官いなくとも気心知れた者同士で難局に立ち向かう

東日本大震災発生当日は自治会長である私は、京都へ旅行中でした。浦安の自宅には息子がいましたが、連絡は取れません。テレビから流れるニュースは津波の話ばかり。これには正直、参りました。その後、浦安も被害を受けているらしいと知ったときは、団地の自治会長をやっている立場から、団地の皆さんはどうしているだろうか、大丈夫か、混乱しているのではないかと、我が家のこと以上に不安でいっぱいになりました。

甚大な被害を受けたニュースばかりが放映され、当たり前のことですが被害の小さいところは全く情報が入ってこない。しかし、住民には足の不自由な方や高齢者、独居者もいましたから心配でした。翌々日の13日には、車を飛ばしてやっと戻ってきたとき、自治会や住民の皆さんの顔を見て全員の無事がわかり、ホッと安どしたのを記憶しています。

しかし、自治会長が指揮を執らなくても粛々と自治会メンバーが各自の仕事を分担していたときは本当にうれしかった。これも日ごろの自治会の交流があったからだと思っています。だれが何を担当するということを決めなくても、おのずと気心知れた者同士では得意な仕事を各自がこなしていく。それを緊急時に見事に力を発揮してくれたのだと思います。夏祭りなど、日ごろの活動も訓練になったのかも知れません。これまでの活動を通じて培った連帯感が、信頼感につながって、今回の被災を乗り切れたのだと思います。



インタビュー日：2012年8月29日

浦安市 70代 男性 自治会役員



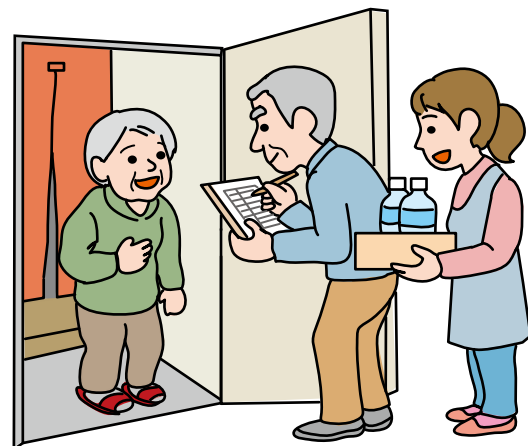
日ごろの交流活動を生かして全戸の安否確認

富岡の団地内には有志によるボランティア住民交流組織「RAN」（レインボーエイジングネットワーク）があります。4年前に設立し、月1回の茶話会、年4回の通信誌を発行し、現在は50人がメンバーです。

このRANの始まりは、もともとは数年前にお年寄りの孤独死が話題になったころ、この団地にも独居者がいましたので、せめて声掛けによる安否確認は地域の間人としての役目だし、地域に貢献していきたいという思いだったのです。

それが団地内の共有部分の駐車場や階段にある案内板の補修など、今ではお困りごとの対応までやっています。あの日も、消えかかっていた駐車場の白線引きを終わらせ、皆が自宅に戻ってきたときの地震でした。

RANメンバーは自宅の片付けも終わらぬうちに、早速集まってきてくれ、団地内のお年寄りや身体の不自由な方の安否確認をしました。安否リストの作成には個人情報保護法下ではまなりません。そこで各棟の階段の踊り場に張りだされたお名前をもとに、全戸確認とリスト化をしました。これが、その後の救援物資の配布などに役立ったことは言うまでもありません。



インタビュー日：2012年8月29日

浦安市 60代 男性 自治会役員



トイレの囲いは透けないシートで

液状化現象というとヘドロの噴出や水びたしを連想しがちですが、浦安の場合は道路がき裂、マンホールが隆起して、団地の建物と道路との間に50～60センチの段差ができてしまったのです。すべてが流されてしまった東北の方々から思えば、私たちの被災は軽微です。しかし、断水、下水道が使えないというのは、階上に住むお年寄りにとっては大変つらいものでした。平たんなところを歩くのにも足もとのおぼつかない人にとって、段差のところを飛び越えるのは大変だったのです。

下水道の復旧は2か月余りかかりましたので、自宅のトイレは簡易トイレなどで工夫をしていました。しかし、それも脱臭用凝固剤が底をつき、団地敷地内に仮設トイレを設置せざるを得なかったのです。当時は地盤沈下や流動化のせいで電柱や街灯も傾き、夜は真っ暗な状態。危険な場所にはロープを張っていたのですが、これがかえって暗い中ではロープにつまずいたりする人がありました。それでロープは撤去することに。

そうそう、仮設トイレでは女性の方々から要望がありました。トイレ内の電気をつけると、トイレの囲いの素材が布張りのため外から透けて見えてしまうというのです。これには参りました。応急処置ですが透けないビニールシートで覆いました。今後、自治会で購入するときは、こういったプライバシーの確保にも考慮していかなければならないでしょう。



インタビュー日：2012年8月29日

浦安市 60代 男性 自治会役員



消臭の決め手はペットのトイレマット

自宅のトイレにゴミ袋を敷いて用を足す簡易トイレを作りました。これは近隣の高齢者の方から「暮らしの知恵」として教えていただいたものです。この簡易トイレのおかげで、いちいち階下にある外の共有トイレにも行かずに済みました。

しかし、最近は皆水洗トイレを使い、老いも若きも消臭に気遣うような生活です。水洗トイレに慣れきった私たちにとっては、自分の汚物であっても我慢がなりません。団地の自治会で、非常時用の消臭凝固剤をストックしていましたので、これを震災直後に各戸に配布しました。しかし、これも底をついてしまった。何しろ、3週間も下水道が使えない状況でしたから、そこまでの備蓄は自治会でも想定していなかったのです。

団地公民館などに設置された簡易トイレでは、自宅のようにゆっくりして使えるものでもなかったため、皆さんそれぞれ工夫をして、ペットのトイレマットやトイレ砂の消臭を利用するようになりました。ペット用といえども消臭力は抜群で、人間の汚物も十分に処理してくれるのです。何でも代用して使う知恵、これは近隣のお年寄りにヒントをいただいたものです。日ごろから「暮らしの知恵」「お年寄りの知恵」を自治会などでも共有していこうと思っています。



インタビュー日：2012年8月29日

浦安市 60代 男性 自治会役員



住民総出で汚物処理 高校生や大学生のボランティアで大助かり

液状化で噴出したものは、泥というよりもヘドロに近いものです。地盤沈下や隆起によって下水管が破裂し、管の中にヘドロが入ってしまい、そこかしこの道路で汚物があふれる状態でした。仮復旧までの3週間は、住民総出でその処理を行っていました。大変な臭気の中で皆やってきたのです。

256戸しかない団地で、平日は150人、土日は約250人の方々が参加。この作業は団地内の掲示板や戸別にチラシで参加を呼びかけたのですが、実際は30人も集まればいだろうと考えていました。しかし、いざふたを開けてみれば、若い人たちの多いこと。きちんと人数の把握はできなかったのですが、団地に住む高校生や大学生らの呼びかけで、彼らの友人たちがボランティアで集まってくれたのです。東北でも多くの方が、ボランティアに助けられている話は聞いていましたが、この浦安にもこういった善意の輪が広がっていることに感動しました。

一つ残念だったのは、ボランティアも数多く参加してくれたのに、スコップ、バケツの数が足らなかったことです。でも、ふだんスコップで作業をすることのない人たちは15分も作業を続けると手が痛くなる。そこで代わる代わる交代制でやりましたので、ちょうどよかったのかも知れません。むしろ土のう袋の備蓄。あのときも土のう袋の確保には一番困りました。土のう袋は場所をとらないので、今まで以上に用意をしておこうと思っています。



インタビュー日：2012年8月29日

館林市 50代 男性 会社経営



間近に迫る竜巻、 冷静な判断でやりすぎず

外出先から戻る途中で竜巻に遭遇しました。

間近に迫る竜巻は、民家にぶつかりバリバリと音を立てて屋根をひきちぎり、また猛スピードで通り過ぎていったのです。息をのむような光景とはこのことでしょう。アルミ板の壁に屋根がわらの破片が刺さるなど、いつも見慣れた町の風景は異様で無残な光景でした。何年たっても、今でも目の前に浮かぶのは、風に舞う枯れ葉のように竜巻の渦の中でヒラヒラする屋根がわらです。

あのときは、自分でも不思議なぐらいに冷静さを保ち車中から竜巻の動きを目撃していました。畑の中を土煙りを上げ通り過ぎる竜巻を見ていて、このまま走行すればぶつかると思い、車を停車してやりすぎたのでした。このとき空は黒い雲が立ち込めていたのを記憶しています。しかし、雨は大したことはなかった。

自然の猛威の中では、我々はなすすべを持たないことを悟りました。ただ一つ、言えることは常に冷静さを失わずに、周囲の状況を判断していかん身の安全の確保に努めることかも知れません。それだけは身をもって体験したことだから、はっきりと申し上げます。



インタビュー日：2012年10月12日

館林市 40代 男性 会社経営



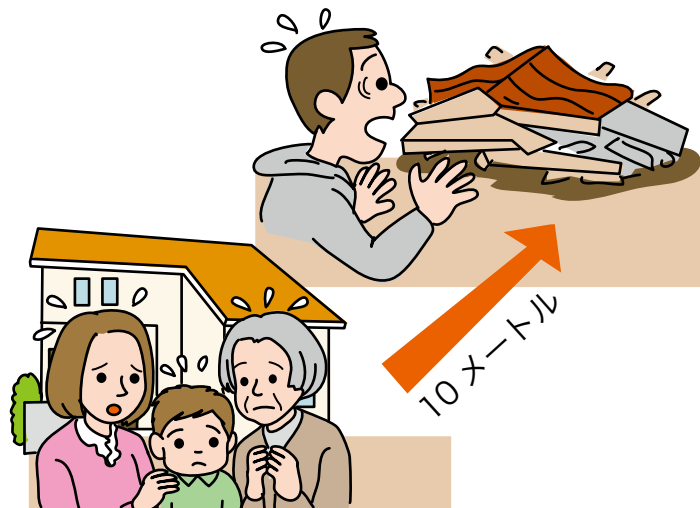
10メートルの差で明暗を分ける

客先に向かっているときに、サイレンの音で竜巻の発生を知りました。急いで会社に戻り、家族や社員の安否を確認しなければならないと思いました。帰ってみれば、事務所も、家族も皆大丈夫でした。無事が確認できてホッとしたところで、同じ敷地内にある倉庫へ向かいました。事務所から、ものの10メートルと離れていない倉庫です。

その惨状たるや言い尽くせないほど。寝かせていた木材が突風に押しやられ、まるで巨人がおもちゃ箱の積み木を軽々と持ち上げたような状態、人間の力ではありえないような場所に材木は置かれていたのです。ものすごい力で動かされたものですから、すべての木材にはヒビが入っていたり、折れていたり、無数の傷もついており、商売には使えない代物でした。

台風するときなどは材木をチェーンで固定して飛ばされないようにします。今回はそのような時間もなかったし、仮に固定していたとしても、あのような突風と強風ではチェーンも歯が立たなかったことでしょう。

事務所と倉庫の位置関係と竜巻の動きがこうした結果を生んだのだと思います。破壊された倉庫の建屋と材木を見て思い出したことがありました。竜巻は時計と反対回りで進むということ。竜巻と強風の通った後は、そこに何があったか、こん跡もなく、がれきだけが残っていたのです。



インタビュー日：2012年10月12日

館林市 40代 男性 市役所職員



すぐに立ち上げた緊急対策室、素早い災害対応につながる

竜巻発生当時、館林市の安心安全課長を担当していました。あのときも消防署を訪問しており打合せの最中でした。そのとき、消防署に出動要請。市内にある大型スーパーマーケットで事故が発生したと通報が入り、すぐに消防署員と駆けつけたのです。駐車場に止めていた30台ほどの車が横転しており、その光景は目を覆うものでした。

その場ですぐに市役所へ電話をして、緊急事態を報告。竜巻発生の1時間後には緊急対策室を立ち上げました。このときばかりは、市長の指示を仰いでいる余裕はなく、自分自身の判断で指揮を執ったことは正しい判断だったと今でも思っています。

本来ならば、防災計画にのっとって防災マニュアルに基づく行動が求められるべきなのです。ですが、災害とは計画の想定外のときに起きるのであって、その場、その場の的確な判断が求められるものです。行政マンとして常に非常時に備えた対応と心構えが求められるのだと、今回の件があっつくづく思ったものです。

その後は被害状況の把握、市長への報告、ビニールシートの手配、地区の集会所を緊急避難所として開設と、矢継ぎ早に対処しました。後はマニュアル通りの実施手順にのっとって粛々と行いました。マニュアルに書かれる前の対処方法というのは、今後職員が全員で情報共有していくべきだと思っています。



インタビュー日：2012年10月12日

館林市 50代 男性 会社経営



急な気温の変化は何かが起る前の予兆と心にとどめる

館林は、夏は最高気温 40.0℃を記録する地域として、毎年マスコミにも取り上げられるほど全国的に有名になりました。ですが、実際には災害の少ない地域としても知られています。これまで、地震や台風の被害もありません。

竜巻の起こった日は昼過ぎにぼつぼつと雨が降り出し、少ししてから強い風が吹き始めたのを覚えています。今思い起こしても、何の前触れもない夏の日の午後だったと思います。ただ思い返せば、竜巻の発生した日、あの日の朝の天気予報では「突風注意」と表示されていました。しかし、上州（じょうしゅう）は「からっ風」でも有名なところで、だれもが「風」には慣れっこになっている。そのせいか、だれもが大して気にもとめなかったのだと思います。

竜巻の発生前には、真夏であっても急に気温が下がり、涼しさと空気が止まったような静けさを感じたのを覚えています。あれが前触れだったといえるのでしょうか。あの朝、前橋气象台が出した情報にもう少し注意していれば被害を軽減できたかもしれない。これも結果論ですが、自然災害の脅威に私たちはもう少し敏感でなければならないと思います。



インタビュー日：2012年10月12日

館林市 40代 男性 市役所職員



14時過ぎに竜巻発生、朝の4時までマスコミ対応

災害時の広報対応については、どこの災害地の行政でも広聴・広報部が対応するケースが多いようです。館林市でも竜巻の直後からマスコミからの問い合わせの電話が鳴り響きました。その内容は被害状況を知りたいというもので、実際、発生直後からの問い合わせだったので、市としてもまだ被害状況の全容を把握できていませんでした。

竜巻発生時刻は14時過ぎで、それからマスコミ対応は翌日の朝4時ごろまで続いたのです。こういった災害のときには、マスコミの記者もあちこちから派遣されるので土地勘もなく、一つ一つの丁寧な対応が求められます。行政マンとして、限られた職員の中で被災現場への対応と、ひっきりなしに鳴り響く電話のマスコミ対応という板ばさみになったというのが事実です。

このときの教訓から、現在は緊急時のマスコミ対応も、広報部だけに任せるのではなく、ほかの部署であっても情報収集する担当、電話やマスコミ対応する担当と、臨機応変に緊急時シフトの態勢を敷きました。情報の一元化は第一にすべきことなので、ちゃんと訓練を受けた職員に現場対応を任せることも重要だと思っています。

情報の開示は定時による記者会見を開き、報道発表をすることも大切だと認識しました。こうして市民への対応、情報収集を第一義にして、時間を決めて定期的に発信していく広報体制が求められると思い、その仕組みを作り始めています。



インタビュー日：2012年10月12日

三条市 60代 男性 市役所職員



住民みんなが顔見知り スムーズにいった避難行動

私は三条市の中山間部にある世帯数26戸の小さな集落に暮らしています。毎冬、雪がかなり積もる以外は自然豊かでよいところ。近くに川が流れていますが底が深いので、これまで洪水など全く無縁と思って暮らしてきました。

しかし、2011年7月29日は、雨の降り方が異常でした。ただならぬ気配を感じた私は、自治会長とともに集落内の見回りを始めました。避難勧告が出たのはその直後です。高齢者などは避難に時間がかかることを自覚しており、率先して避難準備を始めました。住民皆が顔見知り、だれが避難困難者なのかをお互いに知っており、情報交換ができたのは小さな集落ならではのようです。作業も順序立てて、協力し合っていました。

三条市指定の避難所もあったのですが、私たちは集落の集会所を最終的な避難所に独自に指定しました。市指定の避難所は少し離れた場所にあるので、高齢者などのことを考えると移動は困難と判断したのです。

判断が速かったため、避難後は余力のある者が力を合わせて、まず道路を確保し、交通整理を行いました。隣の集落に救出活動に出かける余裕もありました。これだけスムーズに行動ができたのは、日ごろの近所づきあいと統制のとれた自治会活動のたまものと思っています。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 60代 男性 市役所職員



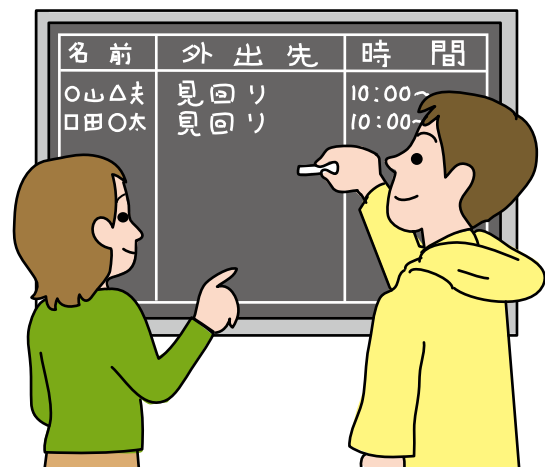
黒板に書いた自分の行き先 居場所の把握が安心につながる

7月29日の豪雨災害で避難所となった集落の集会所では、皆ができるだけ快適に、安全に過ごせるように、高齢者や女性などは1階で、男性は2階で過ごすようにしました。

また、家族を迎えに出たり、救援活動、見回りなどで避難所から外出したりする場合は、たとえ短い時間であっても、その都度各自が黒板に行き先を書くように徹底しました。行き先がわからないと、「どこかで立ち往生しているのではないか」「けがをしてないか」などと心配した家族が探しに出かけたりして、二次災害につながる恐れがあるからです。

だれがどこにいるかを把握しているだけで、皆が安心できるのはあのときの体験からも明らかです。居場所がわかれば電話や伝言による連絡もスムーズにでき、不要な確認・搜索作業などを行わずに済みます。事実、私たちはこの黒板を確認することで、そうした余分な用事や心配に惑わされることは一切なく過ごすことができました。

住民が個々に避難した場合、お互いの所在がわからなくなって知り合いを探し歩いたりする様子は、多くの被災地で見られると聞きます。私たちの集会所のように黒板がなければ紙に書く、道具を使うなど、居場所をお互いに把握できるような工夫をすることはとても大事だと思います。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 70代 男性 自治会長



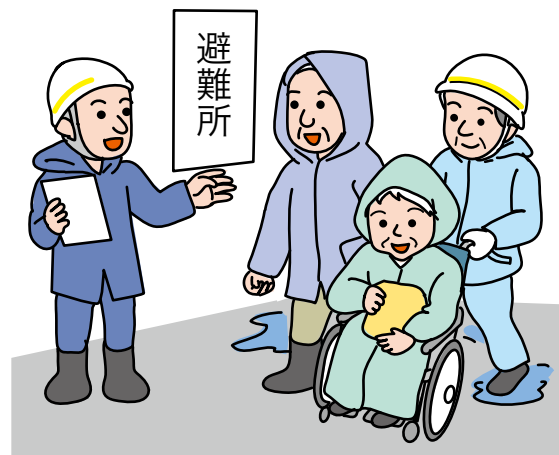
老人会を立ち上げ、訓練重ねた成果を実感

私の自宅のある町（400世帯）は2004年7月13日の豪雨で、床上浸水しました。私の自宅も120センチの水位に達し、水に浸かった我が家を前に、「自然に対抗はできない。正しく理解し、つきあっていくしかない」という思いを新たにしました。

当時、私は自治会副会長の職にあり、2003年ごろから老人会の立ち上げの準備をしていました。このときの資料はすべて流されてしまい、立ち上げは2005年春に延びたのですが、これ以降は毎年、会員の避難訓練を重ねています。自治体から全世帯に配布された『三条市 豪雨災害対応ガイドブック』も大いに役立っています。

楽しさを重視した交流会のような訓練が功を奏し、2011年7月29日の豪雨による水害では会員は皆、スムーズに避難できた上、避難所では互いにいたわり合い、ワイワイ明るい雰囲気でも過ごすことができました。訓練に意味はないという声もありましたが、「絶対安全はない」と訴え、継続してよかったと思っています。

2012年はこの老人会の活動の一環で高齢者の支え合いマップを作成し、また一つ、安心の材料が増えました。これからも避難訓練で築いた、顔の見える関係を大切に、会員以外の高齢者も巻き込みながら、具体的な避難準備を充実させていきたいと思っています。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 70代 男性 自治会長



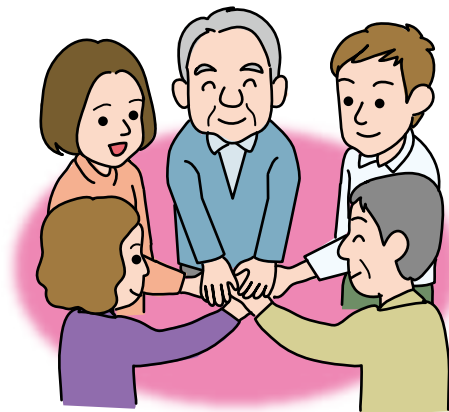
災い転じて福となす
 困ったときの助け合いがききずなをつくる

2004年7月13日の豪雨による水害のとき、私たちはたくさんの方々に助けていただきました。このことへの感謝の気持ちをずっと持ち続けており、中越地震などその後の災害時には、町の人たちと一緒にボランティア活動をしています。

活動を通じた交流は、様々な地域、団体との間で続いています。多くの人と交流する中で、「困ったとき、切ないときの助け合いが、かけがえのないつながりをつくる」と実感し、気持ちが温かくなります。

このときの水害では町全体が水に浸かり、多くの死者、重軽傷者を出しました。住家被害も著しく、あの悲しみを忘れることは難しいと思います。しかし、あれ以来、私はあえて「災い転じて福となす」ということわざを、折に触れて使うようにしています。災害時に多くの人に助けられ、そこから新しい人間関係が醸成されてくる中で前向きな気持ちになれたのです。これを「災い転じて福をなす」と言わなかったら、何と言えればいいのでしょうか。

これからも、つらいこと、大変なことがいつ起こるかわかりません。自然の猛威にまたいつ襲われるかも、だれにもわからないのです。だからこそ、私は災いを福に変える気持ちを持ち続けたい。多くの人がこうした心構えでいれば、いざというときにきっと助け合えると思います。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 50代 男性 会社経営

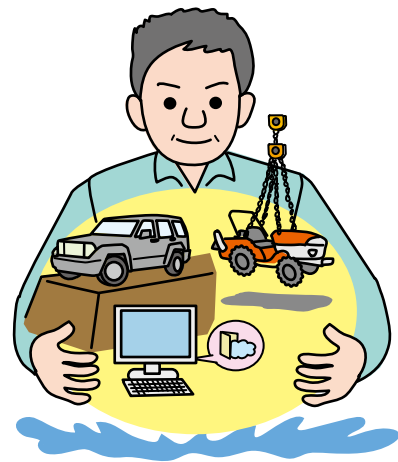


「また来るぞ！」 水害体験教訓に万全の準備

私の家は農家で、2004年7月13日の豪雨による水害で甚大な被害を受けました。このときの体験を教訓に、用心深い父を中心にあらゆる工夫をしてあったので、2011年7月29日の豪雨による水害ではそれほど大きな被害を受けることはありませんでした。

例えば車です。2004年の水害では我が家は車が6台水没しました。そこで駐車場の地面に土を盛り、このときの水位以上に駐車場を高くしておきました。耕作機械も、チェンブロックで天井まで引き上げる仕組みを作り、水没しないようにしてありました。私が仕事で多用するパソコンのデータはネットワーク上のハードディスクに保存してあり、万が一パソコン本体が水没しても全く心配いりません。

私は地域（750世帯）の自主防災会の会長をしているのですが、2011年の水害のときは仕事で少し離れた場所にいました。自宅からの電話で避難準備情報を知り、急いで帰宅。帰路では、自主防災会副会長、総務部長に連絡し、決まった手順通り動きました。この間、大事なものが水に浸かる心配は一切していません。結果的に個人的にも防災会としても問題なく対応できたのは、様々な準備をしてあったからだと思います。合い言葉は「また来るぞ！」。自分の財産は自分で守るしかないので。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 50代 男性 会社経営



つい頑張りすぎてしまう復旧作業
何より大事な自分の健康管理

私たちの町は、大きな川の支流に挟まれたところにあります。大雨が降るとやはり洪水を心配しますし、実際、2011年7月29日の豪雨ではふだんは穏やかな支流の水がうねるように流れ、水位は土手の上の方まで上がってきていました。このまま降り続いたら決壊するかもしれないと近所の人とも話したのですが、何とかその前に雨が収まり、30日には水位も下がってホッと胸をなで下ろしたのを覚えています。このときは町全体に出された避難勧告が、少々大げさに思えたほどでした。

一方で、2004年7月13日の豪雨による水害は文字どおり悲惨でした。電気・ガス・水道はすべてストップ。町にはがれきがあふれ、その片付けや掃除だけで1か月以上費やされました。今思い返すと、町民皆が復旧を急ぎ、焦っていたように思います。若い人たち、働き盛りの人たちは、復旧作業と仕事を両立させなければならず、知らず知らずのうちに頑張りすぎてしまっていたように思います。

そんな中、40代になったばかりの私の弟が、心臓発作で命を落としました。弟のことを思うとき、どんな場合であっても、自分の健康管理ほど大事なことはないと感じます。被災前に戻れるなら弟に言いたい。「自分の体は自分で守れよ」と。



インタビュー日：2012年10月3日

三条市 60代 男性 漁協総代



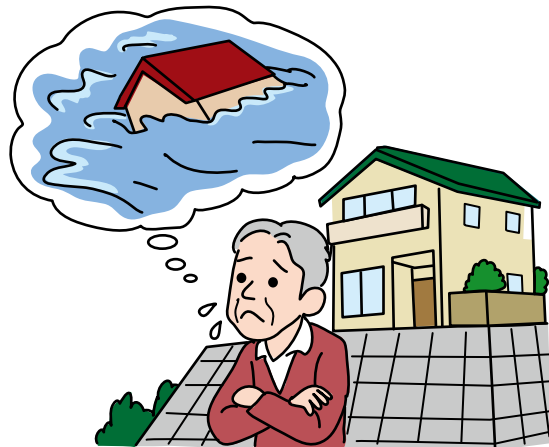
愛するまちに住み続ける
 〽️新しい家は高く、
 地盤のよい場所を選ぶ〽️

2011年7月29日の豪雨による水害で家がまるごと流されるまで、自分は水害など全く想定されない地域に暮らしているつもりでした。近隣は自然が豊かで、毎年冬には多くの白鳥が飛来します。本当に、水害などよその国のことと思い込んでいたので、自治会長だった私は自宅のことは家族に任せきりで、自治会としての対応に追われていました。

私の家が流されてしまったのは、2004年7月13日の豪雨による水害で崩れた川を十分に補修していなかったのが原因とされます。これを思うと悔しくてなりません。補修されていれば被害は防げたと思い怒りがこみ上げるのです。

ショックは大きく、一時は長年暮らした町を遠く離れることも考えました。しかし私の家族が、たくさんの思い出の残るこの町をとっても愛しており、ずっとここで暮らし続けたいと言うのです。その言葉に胸を打たれ、新しい家も同じ町内に新築しています。ただし、高く、地盤のよい場所を厳選しました。

日ごろの備えは大事ですが、個人ではどうにもならないこともあります。行政の取組を始め、町ぐるみの防災がとても大事だと実感しています。1日前に戻れたら、せめて大事なもののくらい運び出したかった。この悔しさはなかなか消えないと思います。



インタビュー日：2012年10月3日

長岡市 70代 男性 錦鯉（にしきごい）養殖



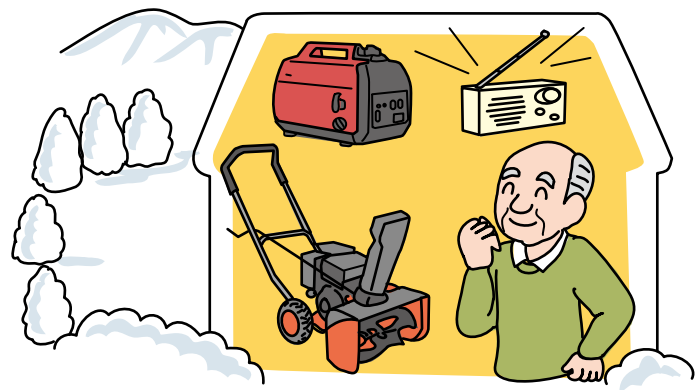
「大地震＋大雪」からも復活！雪国の力強さ （築100年の家で万全の備え）

世帯数14、人口50人足らずの、中山間部の小さな集落で暮らしています。我が家は築約100年。2004年の中越地震のときは、この家が傾いたところに雪が降り、全壊の判定を受けたのですが、その後、大工など仲間を集めて修理し、今も不自由なく住んでいます。

集落には高齢者も多いのですが、親せきの手伝いなど雪対策はそれぞれしているので、大雪に対する不安は皆、さほど強くないと思います。我が家も60代の妻と2人暮らしですが、雪で困ったことは特にありません。

私たちの暮らす集落のような豪雪地帯では、多くの家庭に小型除雪機があるし、田舎ですから、雪を捨てる場所もたくさんあります。冬は夫婦で毎日のように除雪作業をし、大量の雪を家の下を流れる川に流します。

現在は室内用防災無線も完備され、何もなくても無線が1日3回流れるシステムになっていますので、災害時の情報もしっかり受け取れます。養殖の鯉（こい）を守るために発電機も完備しています。こうした日ごろからの備えがあれば、かなりの豪雪もへっちゃら。備えあれば憂いなしというわけです。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 50代 女性 主婦



朝昼夕の除雪は冬の日課

私は公道から少し入った一軒家に独り暮らしをしているので、雪の続く時期は毎日、日によっては朝昼夕の1日3回、自分で私道の除雪作業をしています。1メートルくらい積もれば屋根の雪下ろしが必要ですが、積雪1メートルというのは、2日で積もることもある量で、雪の多い年は雪下ろしだけでもかなりの仕事量になります。

除雪や雪下ろしは、もはや冬の日課となっていますが、地面から2階の屋根までは5メートル以上あり、ときどき、屋根で滑って転んだりして怖い思いをすることもあります。除雪は意外に重労働なので比較的薄着で行いますが、それでも結構汗をかきます。

今はそれほど苦勞なくやっている除雪作業ですが、最近思うのは、「除雪が自分でできなくなるときがいつかは来る、そのときどうするか」ということです。だれかに手伝ってもらおうという方法もありますが、いずれにしても歳をとったときの対策が必要です。除雪が滞れば孤立する可能性もあることを考え、転居も含めて思案中です。



インタビュー日：2012年10月4日

三条市 60代 女性 野草茶生産



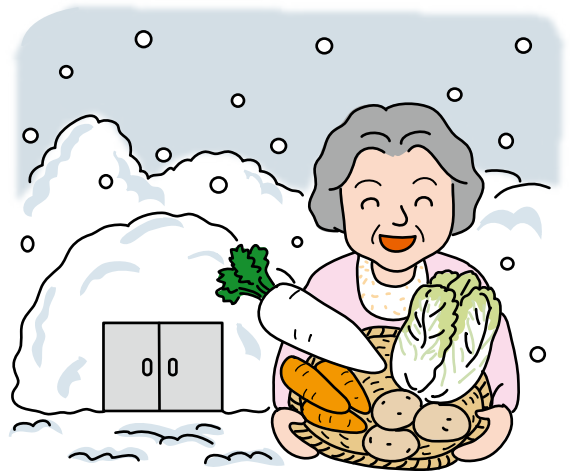
雪室の野菜でおいしい食事 日常生活がそのまま大雪対策

私の暮らす集落では、集落再生プロジェクトが動いており、その一環で、住民が得意分野の匠（たくみ）として様々な商品を開発販売する取組を行っています。私の担当は野草茶。春から初夏にかけて山に入っているいろいろな野草を摘み、陰干しして独自にブレンドするとおいしいお茶ができあがります。冬はこうした作業はお休み。変わって雪かきが日課となります。

豪雪地帯の生活を知らない人たちは、私たちが雪に埋もれて孤立し、食べるものに困ったりすることがあるのではないかと思うかもしれません。しかし、雪国では除雪のシステムがしっかり確立されているので、雪によって集落が孤立するということはまずありません。

それに、雪国の家庭は米をたくさん常備しています。大根、じゃがいも、白菜、かぼちゃなどの野菜類は多くの家庭が自分の畑で作っており、雪室で保管しています。雪室の野菜は、収穫したてよりもみずみずしいのが特徴。みそや漬物もいつでもあります。だからいつでもおいしい食事ができる。保存食に頼ったという経験も、覚えている限りありません。

改めて考えると、私たちのふだんの生活自体が、食料に困らない仕組みになっているのだと思います。意識はしなくても、日常生活そのものが、大雪による災害対策になっているのかもしれない。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 70代 男性 狩猟業



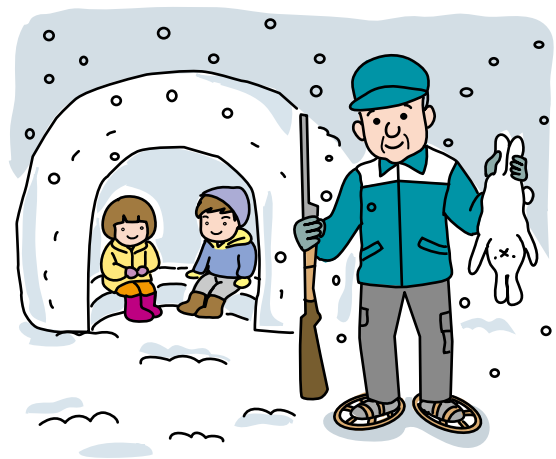
豪雪を味方に！

豪雪地帯で暮らしているとはいえ、これまで生きてきて、雪で困ったという経験はほとんど記憶にありません。ただし、とにかくたくさん降るので、厄介なことは事実です。この大量に降る雪を厄介者から地域活性の目玉にしようと、私たちの集落で2011年冬から始まったのが、雪を利用したイベントです。

雪国の冬の暮らしを体験できるツアーで、新潟県外を中心に20人程度の参加者を迎えています。かんじきを履いて雪山を歩いたり、猟師によるうさぎ狩りを見学したり、大きなかまくらで過ごしたりと、多くの人にとって初体験の多いこのイベントは好評です。

参加者には若い人が多く、それだけでも集落は活性化します。また、ツアー終了後に手紙のやりとりなどもできて、私たちはとても喜んでいました。人が来てくれ、コミュニケーションが生まれることで集落の高齢者も元気になった気がします。

地理的条件や気象条件が不利になり、災害に結びつくこともあるのですが、それを逆手にとって、観光資源として活用するというのは、なかなかよい発想だと思っています。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 30代 男性 復興支援員



雪国の知恵に感心

地域復興を主な事業とする法人の職員として、山間部の暮らしを見直し、産業活性化などを行う活動の支援にあたっています。仕事で山間部の集落を1軒1軒訪ねることなども多く、冬にはその雪の深さに絶句します。また、雪室で食料を保存する、消火栓を高い位置に設置する、雪国体験ツアーなどで県外の人々と交流するなど、その雪をものともせずいきいきと暮らす地元の人々の知恵にはいつも感心させられます。

復興支援の仕事を始めて5年になりますが、雪で困るかどうかは雪の量より環境によることを実感しています。大雪が降ると困るのは、公道のある山間部よりも、むしろ私道の多い地域や、都市部などのようです。都市部はさほどの大雪でなくても流雪溝が詰まったり、除雪した雪が高く積み上げられて視界が妨げられたり道路が狭くなったりと、思いのほか大変です。

大都会では数センチの雪が積もっただけで都市機能がまひしかねないと聞きますが、山間部の集落の人々はかなりの豪雪でも難なく切り抜けます。それは日ごろからの備えが万全だからでしょう。雪害を想定した対策が必要なのはむしろ都市部なのではないでしょうか。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 40代 男性 団体職員



災害ボラセンは1日にしてならず

2004年の新潟県中越地震に際し、長岡市内では様々な団体がそれぞれの分野で活発に活動しました。が、団体間の連携や情報共有はあまりなかった。そこで2010年4月に発足したのが「被災時対応検討会」。次に何か起きたときにより形で協力し合えるように、各種団体が集まり月1回ペースで勉強会を始めたのです。

メンバーはそれまで被災地に駆けつけては自主的に活動してきた人材ばかりを集めたこともあり、議論は濃密かつ建設的でした。「詳細なマニュアルを作成しても災害は多様で想定外の事態が必ず起こる。ならば基本的な考え方と初期対応手順だけを決め、細かいことはその都度判断しよう」という結論に至ったのも、災害現場をよく知る私たちならではだと思えます。

そろそろ実地訓練をしたいと考えていた矢先の2010～2011年冬、長岡は「平成23年豪雪」に見舞われます。社会福祉協議会の合図で「長岡雪害ボランティアセンター（ボラセン）」を設置したのは計画通り。公設民営・共同運営方式のボラセンですから、拠点の確保など活動がしやすく、かつ機動力があります。

このボラセンのベースは言うまでもなく被災時対応検討会での顔の見える関係です。非常時対応は平時の活動がベース。活動を通して、強くそう実感しています。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 40代 男性 団体職員



雪害ボランティア安全管理3つのポイント

「長岡雪害ボランティアセンター（ボラセン）」では、除雪ボランティアは事前登録制とし、あらかじめ除雪経験、雪国での生活経験などを聞いたうえで経験者と未経験者をミックスしてグループ編成をし、雪かきのベテランをグループリーダーに据える方針をとっています。除雪とは想像以上に経験がものを言う作業であり、むやみに未経験者を派遣しても十分なサポートができないだけでなく、危険なのです。

長岡雪害ボラセンの活動は過去2年、幸い非常にスムーズでしたが、万一ボランティアに何かあれば活動は水の泡、という緊張感はいつもありました。そこで、実際にボランティアを派遣する前にボラセンスタッフが現地に出向き、家主の要望を聞きながら状況をチェックする「現場の事前確認」、転落の危険性を考慮した「事前の雪下ろし可否の判断」、事前確認に基づいた「ボランティアへの安全講習」の3つを柱に事故防止を徹底しました。安全講習は、活動内容を簡潔にまとめた独自の手引きをもとに15分以内で説明。現場ではグループリーダーが安全に目を光らせるようにしました。

除雪ボランティアを志願するような人たちには、危険を顧みず人助けに情熱を燃やすタイプが多い。こうした人たちを守るのもボラセンの責務と肝に銘じています。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 40代 男性 団体職員



「からぶりもよし」先手先手で豪雪に備える

一刻も早く救助しなければ命が危ない！ 災害現場では極めて一般的な発想です。しかし雪害は違う。雪害で困るのは日ごろから弱者と呼ばれる人たちで、それぞれの生活上の支援者もだいたい決まっています。雪害はいわば生活の延長。だから平常時にいかにニーズを把握し、非常時にボランティアといかにうまくマッチングさせるかが支援活動のポイントになるのです。

長岡市では2011年、2012年と2年連続で雪害ボランティアセンター（ボラセン）を設置しましたが、2年目の最大の特徴は、降雪シーズン前に「豪雪対応シミュレーション」を行ったことです。ここでは町内会や民生委員を通じた要支援世帯の把握を重視し事前に情報収集。また、除雪ボランティアは前年同様、事前登録制とし、適正な派遣を目指しました。このシミュレーションが後の活動を成功に導いたと思います。

もう一つ、社会福祉協議会の中心的人物による「からぶりになってもいいから準備しよう」という力強い呼びかけもありました。準備がからぶりになることを無駄ではなく、ラッキーととらえて先手先手で動く発想は、予測可能な災害に対し極めて効果的です。

今後はより正確なニーズの把握、自治会、自主防災組織などとの連携を進めます。ボラセンがなくても豪雪で困らない地域づくり、これこそが真の課題です。



インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 40代 男性 団体職員



雪害ボラセンから 震災ボランティアバックアップセンター（VBC）へ

東日本大震災が起こったのは、「長岡雪害ボランティアセンター」が、平成23年豪雪への対応をほぼ終えたころでした。雪害ボランティア活動の余韻がはっきりと残る中での大規模災害の発生です。長岡には直接の被害はなかったものの、「何かしたい」というメンバーがすぐに集結。被災地ではないため予算などが確保できない地域で何ができるのか、活動方法の模索が始まりました。

正式にボランティアセンター（ボラセン）を設立するきっかけになったのは、福島県の方々の避難所の設置が決まったことでした。早速避難所の運営支援のための「長岡災害支援ボラセン」と、支援物資や人材を東北に送る「東日本大震災ボランティアバックアップセンター（震災VBC）」の2つのセンターを発足させ活動開始。双方のメンバーは重なっており、なおかつ雪害ボラセンの経験者がほとんどで、その経験と、もともとの得意分野を生かして精力的に活動できました。

2012年10月現在も長岡市内には500名ほどの避難者が暮らしており、震災VBCは4名のボランティアを中心に活動を継続中です。災害の規模や内容は変わっても、中心メンバーに基本的なノウハウと助け合える関係があればボラセンは十分機能します。それらを育てていくことが、災害に強い地域づくりにつながると思います。



東日本大震災ボランティア
バックアップセンター



長岡災害支援ボラセン

インタビュー日：2012年10月4日

長岡市 60代 男性 遊雪隊隊員



助け合いの文化は集落の誇り
 雪下ろしに駆けつける「遊雪隊（ゆうせつたい）」

私の暮らす集落は長岡市内でも指折りの豪雪地帯で、全世帯35戸のうち約半数が家庭用除雪機を所有しています。冬の除雪は各家庭の日課。屋根の雪下ろしも年中行事のようなもので、ひと冬に10回程度は雪下ろしをするのが通常です。

除雪機を持たないのは高齢世帯など機械を動かす者がいない世帯ですから、当然、雪下ろしも自分たちではできません。そういう世帯のために、地域住民の有志で雪下ろしボランティアグループ、「遊雪隊」を組織しています。結成は10年余り前。現在の隊員は7～8人で、市街地に住む人もメンバーになってくれています。

除雪が必要な世帯の情報は基本的に隊長を通じて入ってきますが、もともと集落全体が家族のようなもの。日ごろから自然に見守りができていますし、必要があれば正式なメンバーでない人も加わって手伝いに駆けつけます。隊員は皆、仕事を持っているので、活動はどうしても日曜日になります。現地で行うのは雪を下ろすことだけに限定し、下ろした雪はまた別のボランティアに片付けてもらうなど連携体制もできあがっています。

私たちに雪に対する不安がこれとってないのは、こうした助け合いの文化が根づいているから。この文化は、豊かな自然や美しい景色にも勝る、我が集落の誇りです。



インタビュー日：2012年10月5日

長岡市 60代 男性



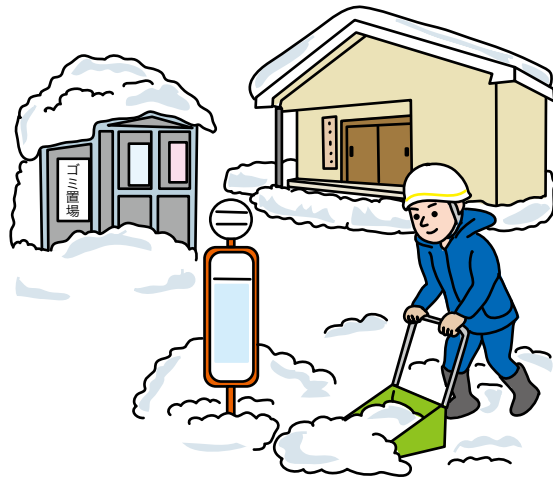
雪害は皆で知恵を絞って乗り越える

私たちの集落の除雪は、各家庭では滞りなく行われているのですが、問題となっているのが空き家です。空き家は除雪をする人がなく、雪下ろしボランティアの対象からも外れるので、しばしば大量の雪が積もり、中にはその重みでつぶれてしまった家もあります。そこで空き家前の道路は早めに通行止めにするなどして対応しています。

もう一つの課題は公共施設の除雪です。従来は2名1組の交代制で行ってききましたが、高齢化などによって参加できない住民が増えたことから、2012年冬、新しいシステムを考案しました。それは、消防ポンプ、集会場、バス停、ごみ置場など除雪の必要な公共施設を改めてピックアップし、それぞれの場所を専門に除雪する担当者を配置して費用を支払う仕組みです。

以前は50世帯ほどあった家庭が2004年の新潟県中越地震を機に35世帯に激減。現在残る60名余りの住民のうち数名の50代を除き全員が60歳以上という集落ですから、肉体労働などはどうしても一部の人に頼らざるを得ません。その負担に報いるために、町会費を1割程度増額してお礼を支払うことにしたのです。

しばらくはこの方法でやってみて、不都合があればまた皆で考える。雪国での暮らしを維持するためには、皆で知恵を絞りながら共に歩むことが何より大切です。



インタビュー日：2012年10月5日

長岡市 70代 男性



災害が広げる新たな交流

雪かき道場で地域活性化

高齢者主体の集落を活性化するためには外部から多くの人に来ていただき、交流するのが一番。そのためには拠点が必要です。その拠点として私たちの集落では、廃校となった小学校を利用しています。黒板など懐かしい設備を残したまま食事付きの宿泊施設、「体験交流センター」にリニューアルし、年間を通じてたくさんの人を受け入れています。

ボランティアと地区住民との交流もここでさかんに行われています。例えば冬には雪かきの方法を勉強しながら除雪も行うイベント「雪かき道場」を開くなど、雪国の特性を生かした活動もしており、全国から若い人たちがたくさん来てくれています。除雪をしてもらった世帯はボランティアの人たちにとっても感謝しているし、何よりも、集落外の人々との交流は私たちの元気の源になっています。

体験交流センターを管理運営しているのは住民で構成される任意団体です。この団体は2000年ごろ、地域おこしを目的に設立され、2004年の新潟県中越地震を機に活動が活発化しました。もし地震が起ころなかったら、外部との交流はこんなに広がらなかったでしょうし、大雪が降らなければ、除雪ボランティアとの交流もなかったでしょう。何より地域がここまでまとまったのは災害のおかげと、今では感謝しています。



インタビュー日：2012年10月5日

～ 編集後記 ～

一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

一日前プロジェクトの物語をお読みいただき、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃいます。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度も、ジャーナリストの皆さんや地域の防災に携わっている方々と一緒に物語作りを行いました。今後も本プロジェクトを進めるにあたり、新たな担い手が増えることが期待されます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html> をご参照ください

物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2~4人集まっていたいただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう?」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探し聞き取りを実施してきました。今年度からは、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも始めています。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきましょう。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

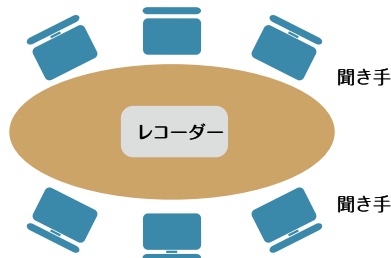
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集 ※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- 日頃から何を準備しておけばよかった

といったお話を聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話を小さなエピソードにとりまとめる活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約650の物語は、内閣府の「被害者を軽減する国民運動のページ」<http://www.bousai.go.jp/km/>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。

「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<http://www.bousai.go.jp/km/>)からダウンロードしてください。

■発行 内閣府(防災担当)

〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2(中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>